



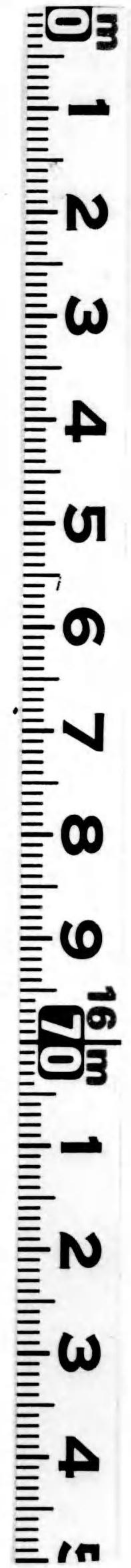
滑糍腹

風雷坊 著作

東京 應來社 發行

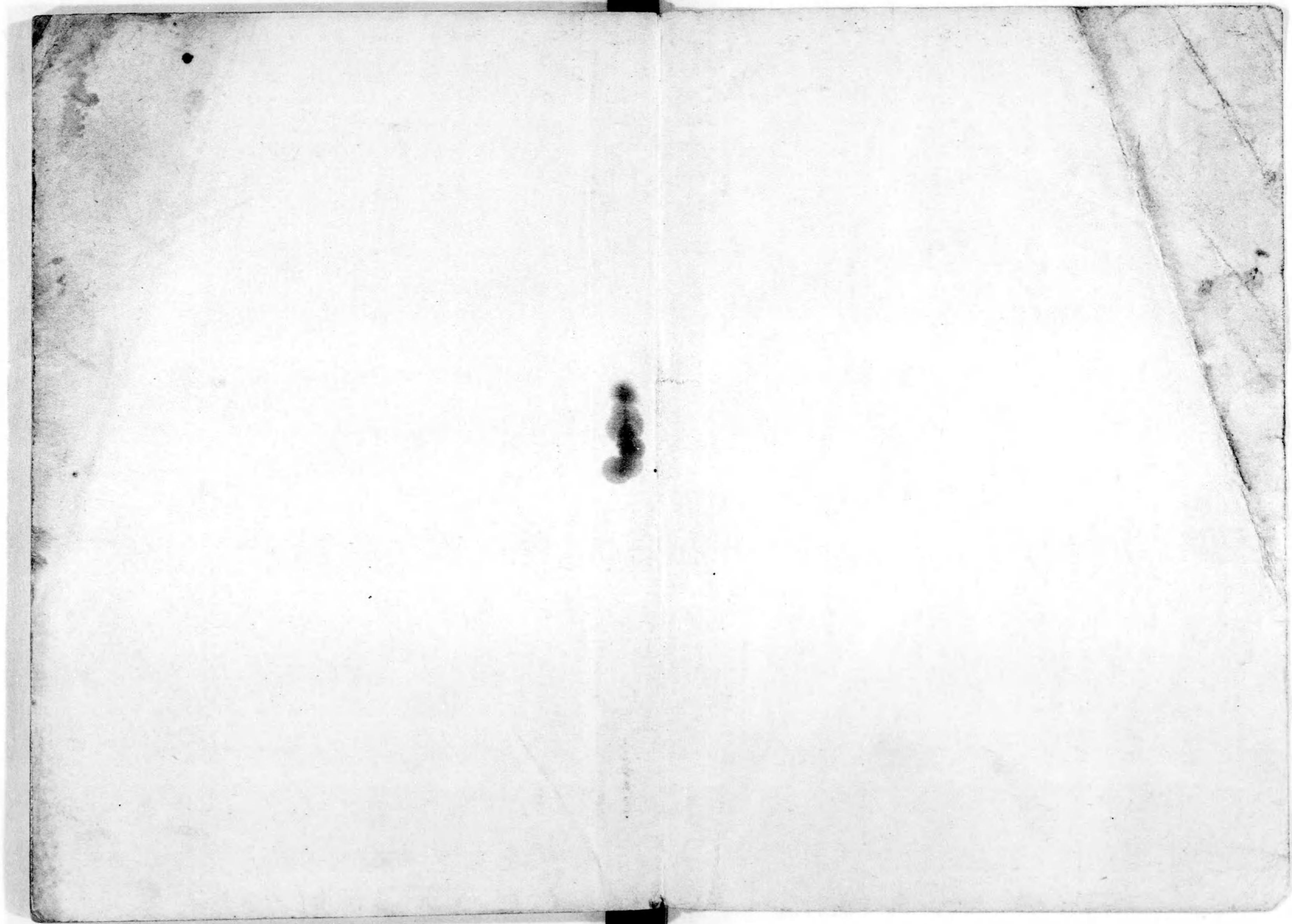
270  
632

特



始





特100  
588



た  
び  
は  
食  
ふ  
て  
見  
よ  
か  
し

狸  
汁

著  
者  
風  
雷  
坊  
誌





1

### 滑稽腹つゞみ目次

文字書帖十五種	一
當世芋作の傳	二
鐵瓶先生の傳	六
新篇とりづくし	八
珍錢金娛經	三
有り過ぎ三話	六
人一疋の力	三〇



三錢哲學……………三三

見やう見かた……………三五

奇なる姓名……………三六

家と眼……………三八

極樂の里程……………四四

道具の不平……………四八

本能と動物……………五〇

金があつて困る記……………五五

硬い者軟いもの……………六〇



くひづくし……………六一

滑稽名所地理……………六四

太平樂……………七四

新算術拾貳題……………七六

文字の妙……………七七

衝突録……………八一

珍作猫の淨瑠璃……………八三

滑稽古人の數學……………八九

追補吾人の數學……………九二



4

天界の生殖法……………五

露、雨、戀……………五

幽霊と同室の記……………七

新殖民のうた……………一〇五

新式壯快歌……………一〇六

新作鳥都々逸……………一〇八

新作動物情歌……………一一三

下女問答……………一二六

興が進まぬ記……………一二九



5

純正新哲學……………一二三

一番嘘をいふもの……………一二六

ペタ〜とバタ〜……………一二九

黑白集……………一三三

昔無くして今有る職業……………一三三

世渡り哲學問答……………一三四

李兵衛の旅行記……………一三七

一 目の穴旅行……………一三九

二 鼻の穴旅行……………一四七



目次終

三 耳の穴旅行……………一五〇

四 口中旅行……………一五五

五 腹中旅行……………一六六

有料廣告……………一六八

一 金を貸したし……………一七六

二 大競争廉賣廣告……………一七七

風雷の詞……………一八二

滑稽腹つゞみ

風雷坊 著

文字畫帖

(一) 馬逸して人逆さまに落つ





(三) 脊中合せ

夫妻



(二) 月落烏啼霜满天

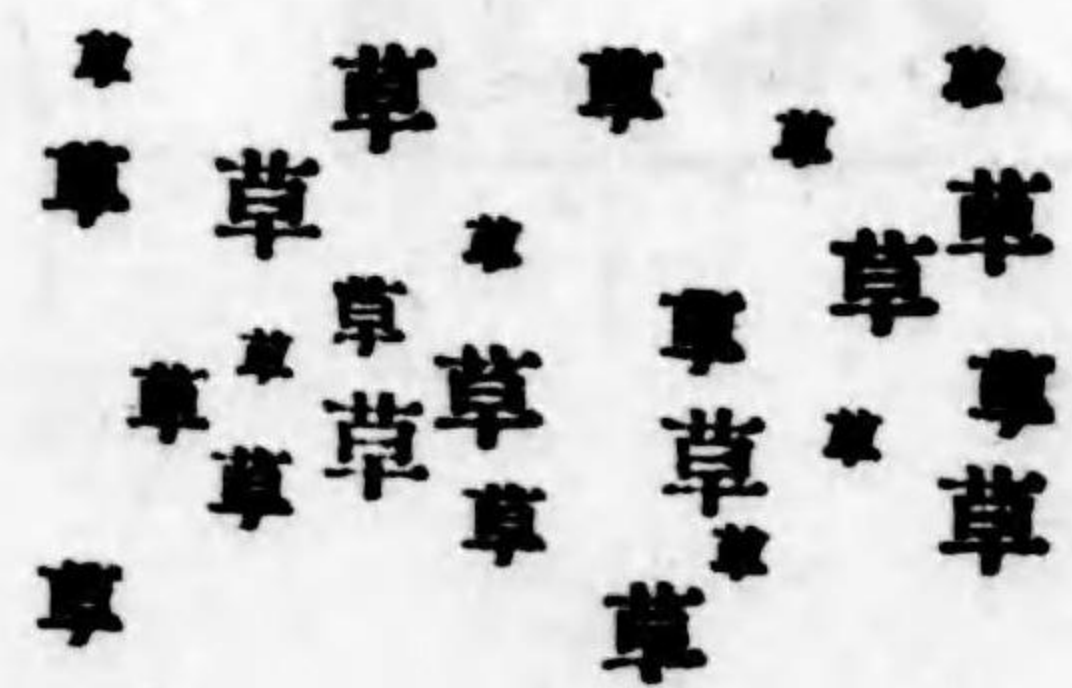
霜霜霜  
霜霜霜  
霜霜霜  
霜霜霜  
霜霜霜

烏月





(四) 天には星、地には草



(五) 飛花落葉





光 光 光 光 光 光 光  
 光 光 光 光 光 光 光  
 光 光 光 光 光 光 光  
 光 光 光 光 光 光 光  
 光 光 光 光 光 光 光  
 光 光 光 光 光 光 光  
 光 光 光 光 光 光 光  
 光 光 光 光  
 光 光  
 光 光  
 星

(八)  
 慧  
 星

陽 陰 陽  
 割 陽 割

(九)  
 和合



(六)  
 満山皆是紅

紅 紅 紅  
 紅 紅 紅  
 紅 紅 紅

(七)  
 血流れて川をなす

血 血 血 血 血 血  
 血 血 血 血 血  
 血 血 血 血 血



(十二) 舞

女男 女男 女男 女男  
男 女男 女男  
女 女男 女男  
女男 女男

踏會

(十三) 提灯行列

提灯 提灯 提灯 提灯  
提灯 提灯 提灯 提灯  
提灯 提灯 提灯 提灯  
提灯 提灯 提灯 提灯



(十) 欲望

主 主 主 主  
主 主 主 主  
金 金 金 金  
手 手 手 手  
手 手 手 手

(十一) 花見

櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻  
櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻  
櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻

人 人 人 人 人 人 人 人  
人 人 人 人 人 人 人 人  
人 人 人 人 人 人 人 人



(十四) 動物園



(十五) 黄昏

山



當世芋作の傳

芋作先生、又の名田子作、字は土百姓、蛙切りと號す、多く素寒貧なるか故に、水呑百姓の稱あり、性質淳朴にして、しかも狡猾、中々食へぬ所あり、田舎者などと申して馬鹿に致せば、お尻の毛迄も抜取られ、頭の鉢を割らるゝ事もあり交通の便開くるに従ひて、木綿着物も絹布と變し、鋤鍬擔ぐもイヤになり、晨に星を戴いて出で、夜は露を踏んで歸り、ドブロク飲んで唄ふたも昔の夢、今日は二十世紀を申す風に



煽られ、頬冠りは高帽と改まり、若い衆様は青年會殿となり  
 二宮宗の教へより國民元氣の養成論、實業といふ大太刀をふ  
 りかざし、時計手にせる其風采は、芋作殿とは見えざりけり。  
 反つて説く、其昔芋作と申せば、チヨン鬚頭に、縊縷の着物  
 破れ笠には破れ簔、澁紙面に風呂敷包、握り飯には味噌の餡  
 梅干に舌鼓を打ち、粟飯に腹大鼓をたつき、鹽肴に無上の御  
 馳走を感じ、嫁入り賀取りにも大根菜漬は勝手元の御自慢、  
 伊勢鰻一ケに、吸物椀をハネ飛ばし、これはドエライ御引出  
 物といつば、鮭の切り身か鱒の一疋、鯛膳といへば豪奢の一



つに數へらる、數の子に御家の永久を祝し、煮豆に子供の壯  
 健を祈り、氏神様には種油の燈明、佛壇の前では南無阿彌陀  
 佛、地藏の首にも珠數をかけ、觀音の像にも花を飾る、家は  
 破れ家を意とせず、土藏でもあれば、評判の金持、疊は藁敷  
 を以て満足し、薪は枯松葉を燻して、障子の紙は赤黒きを誇  
 る、それが今日電氣となり、石炭となり、瓦家根となり、二  
 階建となり、青疊となる、黒柿の床には新書の一軸、若夫婦  
 の寢室にも、洋風の油書はチラつき、三度の食事にバター臭き  
 をも感じ、砂糖少くんば味良からず、塩甘からざれば口に適



せず、牛乳の御用あり、ココヒーの買入あり、欠茶碗は九谷焼と代り、お客の接待にも洋菓子を誇る、あはれ源氏豆はカステラとなり、塩煎餅は「モナカ」ビスケット」と變る、芋作の變遷も夫れヒドイかな。

遮莫、地續きの境界を争つては、目を白黒にし、隣り畑の茄子をチギつては、晩菜の一部に加へ、山林には盗伐、柿の木には猿猴の離れ業、葡萄の下蔭に一ふさを頂戴する事は素より、大旱りには水掛論、洪水には堤防の争ひ、草刈論より大根論、抜きあひ取り合ひ、又切り合ふ事は、昔も今も異ら



ず、金錢の戦ひには一厘をも余分にとらんとし、賣る物は高く、買ふ物は安きやうにと、中々如才はあつた者なり、芋作殿として馬鹿には致スナ、馬鹿にするナイ、バカサレルゾ、コシ〜チキ〜コロリノチン





### 鐵瓶先生の傳

鐵瓶先生、本名鐵瓶、字鐵瓶、鐵瓶はドコ迄も鐵瓶なり、火鉢の中は五徳と稱すれど、三脚の上に鎮座ましまして、チン／＼鳴々のお相手をなす計りか、チン／＼カン／＼と音を立て、好者に清風の俳號を帶せらる、出來たてのホヤ／＼には鐵氣出て、頻りに妻君を困らすれど、中身が醜の太夫と變せし時には、誠に以て其味ひよく、藥罐先生よりは、ズツと上席なり、茶釜の代用には是非無くてならぬ先生、形に



は長さあり短さあり、丸さもあり四角ばつたもあり、顔の模様も千差萬別なれど、其南瓜らしき所と目方の重さとは、或は飯焚き下女にも例へつべし、晨には飯喰い後の溜飯を下けしめ、晝の茶漬もサラ／＼旨く、夕には寢酒の燭をもなす、或は玉子茹で共なり、振出し薬の料をも注ぐ、先生や常に夫婦和合の間に介在し、能く軟々たる艶話を聞くに堪ゆ、誠に以て仕合者といふべし



新篇とりづくし

- ◎今年も一ツ年をとり
- ◎昔の婆さん糸をとり
- ◎藝者は左の襦をとり
- ◎會社の役員月給をとり
- ◎力士はいつも角力とり
- ◎昔の戦さは首をとり
- ◎早く鳴くのが一番とり
- ◎猫は鼠みを一ツとり
- ◎船頭は船の楫をとり
- ◎官吏は何れも俸給とり
- ◎芝居小屋では木戸をとり
- ◎泥棒は人の物をとり
- ◎勝てば償金土地をとり
- ◎樺は十字の綾にとり



- ◎薙刀小脇に裾をとり
- ◎新聞記者は筆をとり
- ◎那智の瀧に垢離をとり
- ◎餅を搗くには杵をとり
- ◎五月は早乙女苗をとり
- ◎小僧隠して物をと
- ◎庭の柿をばソツととり
- ◎須磨の浦には濱千鳥
- ◎豊臣太閤天下とり
- ◎敵が来たぞと太刀をとり
- ◎風呂屋にいつて垢をとり
- ◎質屋は着物を質にとり
- ◎夏は田畑の草をとり
- ◎夫婦小供で寫真とり
- ◎公正證書を楯にとり
- ◎障子の塵を拂ひと
- ◎昔の大名國をとり
- ◎大臣參議は笏をとり





- 馬子は荷馬の手綱とり
- 兎角仕事は人氣とり
- 成蹟良いのは點をとり
- 魚肴食ふは骨をとり
- 晦日に來るのは借金とり
- 女の化粧は手間をとり
- 堅い約束證書とり
- 足元見では金をとり
- 腐つた所は切つてとり
- 政府は民より税をとり
- 乞食は物を拾ひとり
- 悪い役人賄賂とり
- 醫者は病者の脈をとり
- 御用如何は注文とり
- 金談兎角ヒマをとり
- 酒といふ字は水にとり
- 毛拔で鼻毛を抜いてとり
- 珍物兎角高價くとり



- 病人手をとる足をとる
- 四十七士は仇をとる
- 強盗威して財布とり
- 脊長伸びれば肩揚とり
- 網にかゝるは阿呆とり
- 耕す農夫は鋤をとる
- 連判帳には印をとる
- 寺の寶物見料とり
- 馬を打つには鞭をとる
- 綺麗な羽毛は孔雀とり
- 川で釣する魚とり
- 妾や眞實に籠のとり



錢珍金娛經

頭秃故不貴あたまはげたるがゆゑにたつとからず  
 以有金爲貴かねあるをもつてたつとせしむ  
 金是萬年寶かねこれまんねんのため  
 無光爲貧乏ひかりなきをびんげふとなす  
 倉內金充滿くらのうちにかねじうまんし  
 信用忽到來しんようたちまちたらうら  
 黃金永有光わうこんながくひかりあり  
 以有金爲貴かねあるをもつてたつとせしむ  
 金是一生寶かねこれいつしやうのため  
 地獄道依金ぢくのみちもかねによる  
 人無金即愚ひさかねなければすなはちぐ  
 懷中亦多金くわいちうまたかねおほければ  
 兄弟金他人きやうだいもかねはたにん  
 位階依黃金ゐかいはうごんによる  
 男美故不貴をとこびなるがゆゑにたつとからず  
 金失生計難かねをうしなへばせいけいかたし  
 金不封無光かねをもたざればひかりなし  
 有金非人賢かねあればひにんもけんなり  
 雖不積現金げんきんをたまはずといへども  
 有金他人親かねあればたにんもおやなり  
 人無金身衰ひさかねなければみおそろへ



心神常煩悶しんしん つねにはんもんす  
 金持世不益かねもちよをえきせず  
 除眠節食貯わたりごきよくをせつしたくはへよ  
 徒拜金勿笑いたづらにはいけんをわらふなかれ  
 雖大人愛金たいじんといへどもかねをあいし  
 爲無金一人者かねなきひとのためには  
 無金不繁榮かねなればはんえいせず  
 金光掩日月きんくわうじつげつをおほひ  
 父母別金錢ふぼもきんせんはべつなり  
 幼童有金時わうちゆうもかねあるときは  
 子息多馬鹿しそくはかおほし  
 忍飢一時間うきをしのぶはいちじかん  
 金權是人權きんけんこれじんけん  
 官人亦好金くわんじんまたかねをこのむ  
 一品無賣人いつひんもうるひさなし  
 黃金出世道わうこんしゅつせのみち  
 親族有金近しんぞくもかねあつてちか  
 師匠教依金ししやうかねによりてをしへ  
 老人猶讓步らうじんなほほをゆづる  
 但儲金勿怠たしちよきんおこたることなかれ  
 債鬼苦永劫さいきのくるしみはえうごふなり  
 小人勿擯斥せうじんひんせきするなかれ  
 雖商品充店しやうひんみせにみんさいへども  
 雖賢秀之出けんしゆうのしゆつさいへども  
 金權動正義きんけんせいぎやうごかす  
 夫妻繫金緣ふさいきんえんにつながり  
 朋友依金交ほういうもかねによりてまじはる



己使レ金親レ人  
 不レ使レ金疎レ人  
 人而無レ金者  
 不レ異レ於ニ犬猫  
 人而有レ金時  
 奸曲猶聖人  
 不レ交ニ黄金友  
 何知ニ浮世樂  
 不レ乘ニ黄金船  
 誰知ニ黄金味  
 安樂園雖レ廣  
 無レ金人不レ遊  
 歡樂都雖レ嘻  
 無レ金人者悲  
 尊レ金如ニ父母  
 愛レ金如ニ我妻  
 我レ有レ金人敬  
 己有レ金他親  
 無レ金逃ニ骨肉  
 人無レ金下レ頭  
 先始作ニ黄金  
 人見ニ黄金顔  
 貧相忽福相  
 他人金無レ價  
 自家金有レ價  
 欲レ達ニ己目的  
 欲レ得レ金速働



得レ金即勿レ離  
 保レ金者招レ幸  
 譬町人婚ニ貴族  
 貴族如ニ喜來  
 貯金生ニ利子  
 利金更生利  
 富貴來ニ自然  
 雖ニ卑賤ニ高貴  
 雖ニ馬丁ニ主人  
 夫難レ得黄金  
 又易レ失黄金  
 黄金是神聖  
 金錢是萬能  
 盖有レ金自在  
 自在即幸福  
 死不忘ニ金溜  
 必莫レ廢ニ蓄金  
 故末代賢者  
 先可レ案ニ此經  
 是自由之始  
 身終勿ニ忘失



### 有り過ぎ三話

◎いつぞやの大晦日に、一切合切支拂つた差引残りが、純金高壹萬八千五百圓と六錢五厘あつた、最も妻の臍線百五十圓まで入れての事だが、親子三人の家庭では此處分に困つてしまひ、誰か有利の條件で借りて呉れる者はないか、又は使つて呉れる者はないかと、鐘や大鼓で探す迄もなく、事實壹萬八千餘圓の残りを手持て居ては、之もカナリ苦勞の者だせと、鼻高々の所を、それぢや借りてやらうかといへば、ナ



ニ残りは借金サ……………

◎僕の兄弟は男女共拾貳人あるか、其中僕の弟が一人男子の外、あとの拾人は皆女で、それが残らず二つ違ひ、母親に似た瓜核顔で阿父に似て鼻筋が通り、眼元パッチリ色白く、腰は細ツそり柳腰、今は皆年頃になつて、どこか相當の所へ嫁にやりたいと、思つてゐるが、縁はエナ物アデな物、適當な所もなく、毎日家に列べて置くのも、宜い加減心配な者だといへば、それぢや一人貰はうかと頼み入ると、ナニ事實は人形でスヨ……………



○僕の親戚程、金持の多い所はあるまい、マア僕の家は公債  
 證書で五萬圓計りの小ツボケな者だが、母の實家が田畑山林  
 で、七萬八千六百町歩、銀行預金九拾貳萬參千七百圓、信用  
 貸が五千萬圓計りある、父は養子で其實家が又これ以上、現  
 金が金庫の中に貳百萬圓以上絶やした事はない、夫で姉の嫁  
 入先が、多額納税の貴旗院議員、妹の縁先が華族様で伯爵、  
 昔五十萬石の殿様だから言はずと知れた事で、弟の貰はれた  
 先が、之が銀行家で田地持で、工業家で商業もやつて、雇人  
 丈が三千四百人を欠いた事はない、其上祖母さんの實家が北



海道丈で拾八萬九千七百町歩の開墾地と汽船の拾八隻も持つ  
 てゐる、實際こんな親戚を持つても心配だよと語れば、相手  
 の男が、ハーツと息をしたハズミに、オー寒いと茅屋の壁か  
 ら月がさし込み、夢にしちや餘り景氣が良過ぎるネ





## 人一疋の力

兎角世間では、人一疋などといふて、人間様御一人を輕蔑する傾があるが、人一疋といふても人間によつては大切な者である、醫者、産婆、鐵道、電車、その他殺人器械を備へてゐる者は、最も氣を付けべきである

▲弓削道鏡といふ坊主は只一人であるが、嘗て日本の國體を危くした

▲楠正成は只一人であるが、南朝の忠臣として其名は千古



萬古に傳はつてゐる

▲太閤豊臣秀吉は、一人で天下を掌握した

▲三千の宮女を樂み、阿呆宮を作つて威張つたのは、秦の始皇帝一人である

▲『澁かるか、しらねど柿の初ちぎり』こんな名句を吐いたのは、加賀の千代一人である

▲『元日や目出度もあり目出度もなし』と觸髅を擔いで人生を諷した一休は只一人である

▲源平の戰に、扇の的を射抜いたのは、那須與市一人である



▲アメリカ大陸の発見をしたのは只一人のコロンブスである  
 ▲汽車や蒸氣船の動く原理を發明したのは彼のワット一人である

▲どこの國でも帝王は只一人である

▲釋迦も一人、孔子も一人、キリストもマホメットも只一人である



### 三 錢 哲 學

(是れ經濟學の大極意)

- ▲焼芋を買へば 一人では兎ても食ひ切れぬ
- ▲乞食にやれば 頭の三遍位は必らず下げる
- ▲煮豆を買へば 一回のお菜には有りあまる
- ▲豆腐殻ならば 大玉二つ五升鍋の用意肝要
- ▲郵便になれば 思ひのありたけ千里に届く
- ▲車夫にやれば 一里ぐらゐは余計に駈ける

### ◎ 金 三 錢



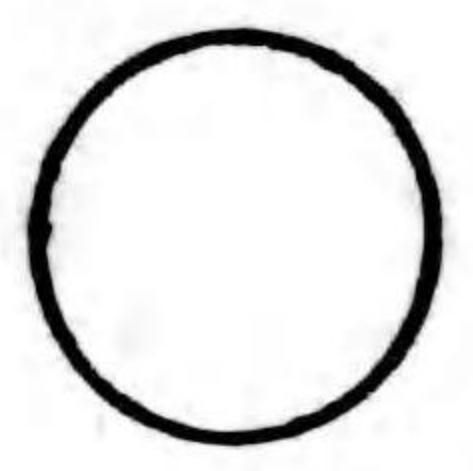


◎金三錢

- ▲石油にすれば ランプ一ケで二夜は明るい
- ▲焼麩を買へば 貳十余個から三十個はある
- ▲麩糊にすれば 障子の張替二十本は請合ふ
- ▲水道に拂へば 一日四人三日の命は大丈夫
- ▲牛乳を買へば 汽車の窓からは二錢の不足
- ◎藝者遊びには 五百倍あつても贅澤出来ぬ
- ◎煙草になれば 見る／＼うちに煙と成行く
- ◎林檎を買へば 小さいやつがたゞ一ケなり
- ◎お酒にすれば チョツぴり咽喉が濡れる丈



(たか見うや見)



治まる御代には太平の象  
 壊れ物では茶碗の糸尻  
 長いものでは大根の切口  
 障子に穿つて穴となり  
 人にたとへて坊主の頭  
 子供の目には輪と見える  
 目鼻つければ顔になり  
 雲を書けば月になり  
 赤く染めれば日の丸となる





奇なる姓名

鳥の部

五位鷺之助 をしりむつのおすけ	七面鳥之助 めんじりのすけ	矮雞小太郎 ちやほこたろう	軍雛強 しゅうひつたけ
鴛鴦睦之助 むつむつのおすけ	鴨野味良 かものあぢよし	鶴羽四郎次 つるはしろうじ	小雀三郎 こすずめしやべらう
木兔巨眼 みづくきよがん	雁金連行 かりがねれんかう	鴛田才治 とびたさいぢ	小鴉勘三郎 こからすかんさぶらう
鳩豆空也 はとまめくうや	熊鷹剛 くまたかつよし	須磨浦千鳥 すまうらちさきり	山中子規 やまなかしき
鸚鵡甲斐志 あうむかひし	孔雀羽美 くじやくはねよし	大鷲猛 おほわしたけし	黃雛鋼好 わかしはなべよし

雜種の部



富士山高子(令嬢向)	鶯初音(音楽家向)	南瓜大子(體操家向)
青菜鹽左衛門(家令向)	鋤鋏鎌之助(若者向)	妹背鶴子(花嫁向)
霜降菊之助(若旦那向)	細筆紙松(番頭向)	小鯛や雀(藝者向)
青瓜蔓助(八百屋向)	虎髯(長華族向)	藪草蛇郎(壯士向)
茶碗欠之助(落語家向)	白砂雪子(和文家向)	大白五郎八(労働者向)
細越柳子(お妾向)	板子一郎(船長向)	急流(議論家向)
戀中深子(女學生向)	山中幽子(後家様向)	紫あやめ(女優向)
大竹輪太郎(桶屋向)	青山潤(會社屋向)	夏草茂(壯俳向)
冬野寒山(禪坊主向)	日蔭豆子(舞妓向)	

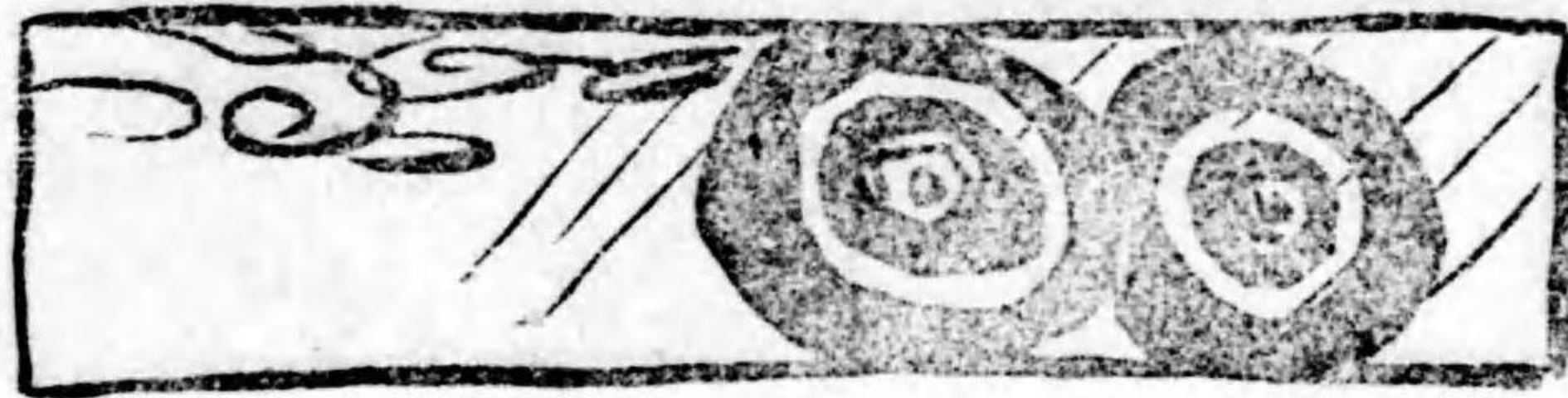


## 家と眼

- 一般通行人見て曰く、之は素敵な家だ
- 李兵衛八左衛門曰く、訥助の奴も平生吝な野郎だが、家だけは金をかけたな
- 田舎のポット出先生曰く、之は御役所たんべい、村長殿の家より立派だ
- 工事請負人曰く、ハハア出来上つたな、……五千圓と迄は行くまい



- 裏店の女房曰く、厄介な物を建てやがつたネ、襦袢一つ干せやしない
- 保険會社員曰く、これはよく出来た、イクラの價値があるだらうか……一つ交渉して見やう
- 隣家の亭主曰く、ナニベランナー、おれだつて今に之より立派なのを建て、見せる
- 片隣家の老爺曰く、私は家は建換へません、これで結構です、イクラ家が立派でも、中味が空では仕方がありません
- 高利貸連中見て曰く、奴とら〜こんな家を建てやがつた



な、しかし何をしたらか知れぬテ

○建築工夫見て曰く、フウム中味は板のガンドーか、誰がやつたか、それでもうまく出来て居る

○家屋貸借の周旋屋曰く、是はいくら位で貸す積りかしら、多分自分で住むのぢやあるめえ

○銀行の行員見て曰く、ハハア抵當にするから是非にと頼んで来たのは是たつたナ、アツハツハ

○商館の番頭見て曰く、是は何の目的で建てたのだらう、輸入商か輸出商か、それとも何だらう



○醫師の玄關番曰く、病院にはチト構造が悪く、商店には家賃が高過るだらうし、イヅレ是は山師の仕事だな

○建築會社の社員首を捻つて曰く、悉皆無難に辨償か出来やうか

○地主の親爺見て曰く、ウムよく出来た、是で追々値上げも出来る

○消防手の一人曰く、厄介な家を建てやがつた、火事の時はどうする積りだ

○電燈會社員見て曰く、今に申込んで来るだらうが、良い得



意が出来た

○瓦斯會社員曰く、何れ勝手向は瓦斯の構造だらうか、それとも一つ聞いて見やうか

○見え坊の妻君亭主にネダツて曰く、那も早くこんな家を造つて下さい、それとも引越して頂戴な、ホントに友達にも

キマリが悪いわ

○宇宙の大哲學者と稱する人曰く、世には火難盜難水難震難此家も何百年保つてあらうか

○泥棒の親方見て曰く、アノ電柱の處より上れば窓はアノ邊

にある、彼處を逃げ出せば大丈夫、然し金庫が如何だらう

○車屋の親方見て曰く、今にどんな商賣を始めるだらう、殊によつたら二三臺は抱へに来るだらうか、それとも車でも抱へるかナ

○牛乳配達曰く、病院ともなればウマイがな

○町内の子供曰く、吉公の所では大きな家が出来上つたヨ





### 極樂の里程

これは其昔大原問答といふて、淨土宗の開山法然坊といふのと、天台宗の碩學智海法印といふのが、大議論をした、其大議論の一節である、一方は淨土宗の御先祖様、一方は比叡山三千坊中の議論家、餘程面白い者であつたらうと思はれる、しかしながら此里程の計算は、其問答を寫した本にある其まゝで、私の計算した者ではない、故にたとへ計算違ひがあらうとも夫は私の保證し得ぬ事だ、又何十何万億などといふ事



は、到底粗雑な頭では勘定しきれぬ事であるから、物好きな數學家があつたら、宜しく計算して見給はん事を希望する、サテは其時智海法印問ふて白く如何にこれ法然坊、其方は極樂といふ所は、ヒドウ手近にあつて、容易く往かれるやうな事をいふが、其方の根據とする阿彌陀經には左の通り書いてある、曰く  
 これより拾萬億土を過ぎて世界あり  
 名づけて極樂といふと、  
 今我輩が四分律の説相によりて見るに、一佛土の里數は



八拾壹億三千參百萬參千貳百二十七里十四間四尺  
 と説いてある、故にこれを十萬億合せて見ると、實に  
 八百十八萬三千三百兆三千二百七十四萬四千七百四十  
 億零一万二千八百十三里十四丁三間一尺  
 となる、故に之を人壽八萬四千歳の時、身の長八百丈とし  
 て、道を行く事一日に一萬六千里づゝとすると、一年三百  
 六十日として、五百七十六萬里づゝとなる、此一年に五百  
 七十六萬里づゝ行くとして、死ぬまでが八萬四千年、八萬  
 四千年を一生涯として、サテどの位往くかとする、中々



以て三代や五代では其半分道もゆかれぬ、依つてこれを計  
 算すると、實に、  
 一萬八百二十七億九千七百三十八萬一千二百三十代目  
 の、六百四十六歳の秋の八月六日、未の下刻といふに  
 漸く往きつく勘定となる、されば如何程手早い其方の  
 法門でも、さうウマクは參るまいナント〜  
 と詰め寄つたといふのが此談の眼目である、さて是からが議  
 論の中樞となるのだが、轉迷開悟すれば、極樂地獄は胸の中  
 にあるのだから、さう遠い事もあるまい



## 道具の不平

▲ガタ／＼ゴロ／＼コツツンカン、それまた割りやがつた

(樫鉢)

▲トントン、ハントントン、クワンクワン、そら當つた(杵)

▲スイスイスイ、スイスイスイ、ツウキウーそら引かゝつた

(鉋)

▲カンカン、カンカンカン、ゴツンカン、そら先きが折れた

(鑿)

▲ゴロゴロゴロ／＼、ゴロゴロ／＼、あつと外れた(石臼)

▲ガラガラ、ガラガラツ、グワツタアーン、さあひつくりか

へつた(車)

▲ガツチン、ガチャ／＼グワツチャン、又壊した(ランプ)

▲ゴリゴリゴリゴリ、ゴリゴリゴリンピン、そら折れた(鋸)

▲ギイーギイーギイー、ギイーギイーツ、ズトン、おーあぶ  
ない(釣瓶)

▲ピンピン、ペンスンペンスンピン、さあ一切れた  
(三味線)





本能と動物

- ▲猫曰く ア、肴を食いたい鼠も欲しい
- ▲兎曰く 月が出ないかナア木を噛らう
- ▲犬曰く 吠えつきたいナ小便でも嗅う
- ▲猿曰く 彼奴面白いドレ真似を仕やう
- ▲蛇曰く 蛙一疋欲しい鼠ならば猶良
- ▲狸曰く ドリヤ腹鼓でも打う良い晩だ
- ▲鮪曰く 土藏の隅を探さう石垣も倦た



- ▲馬曰く 騎手を蹴飛して飛んで見たい
- ▲牛曰く 自由に寝轉んで草を喰ひたい
- ▲龜曰く 浮世は騒しい我世は太平なり
- ▲鶴曰く わが子程可愛い者は外にない
- ▲鳥曰く 又死にさうだ團子に有付れる
- ▲雀曰く 米が澤山落ちて居る旨ぞ
- ▲鳩曰く 豆が一番うまいポツポツポ
- ▲鯨曰く ウント潮を吹て船でも覆さう
- ▲鯛曰く ポクリポクリポカンポカアン





▲鯉曰く 彼の水が嬉しい昇つて見やう  
 ▲鯉曰く 子が澤山に出来た嬉しいく  
 ▲鮒曰く 鰕が飛んで居るヒヨイヒヨイ  
 ▲鰕曰く 此水の味ひが何んとも云へぬ  
 ▲鰕曰く これでも鯛の次席だ省懼れる  
 ▲鯨曰く 此髻がピンと跳ねた處が生命  
 ▲蛙曰く 人間より己の天氣豫報が當る  
 ▲蚊曰く あゝ人間の熱い生血を吸たい  
 ▲虱曰く 垢を溜たが因果だ食つてやれ



▲蚤曰く 食ふと飛ぶと隠れるでは親方  
 ▲蠶曰く 人間より偉いぞ身から黄金だ  
 ▲蝶曰く この美しい所が取柄であらう  
 ▲鼠曰く ドレ米俵をウント喰つてやれ  
 ▲蛇曰く 馬や人間に刺撃を與るが己だ  
 ▲蛤曰く パツクリ開て居る計ぢやない  
 ▲蜆曰く 食つて甚たおいシイであらう  
 ▲狐曰く 威かしくサると悪戯をするぞ  
 ▲象曰く 動物中で大きい物はあれぢや



- ▲龍曰く 雲を起し雨を降らせ雷を鳴す
- ▲鳶曰く ヒイヒヨロ／＼風が起るぞツ
- ▲鷺曰く 一ツ人間でもさらつてやらう
- ▲鷹曰く 鷹狩とは己が主人様での事だ
- ▲鶯曰く 春の來たのを知らせるは己だ
- ▲鶏曰く 時計にもなり滋養物もつくる
- ▲鶩曰く 川の中のゴミは美味しいものだ
- ▲鴨曰く チン／＼鴨、オヒヤリゴデン
- ▲鴨曰く 秋の景物には己が一番だらう



- ▲狼曰く 人を噛るのはおれの性質だぞ
- ▲鹿曰く 角の價値あるのは己れ計りだ
- ▲猪曰く 猪食つた報いドウダ美味だろ
- ▲熊曰く 膏藥にもなり皮は千金の價だ
- ▲蠅曰く 御先祖様は人間さまで御座い
- ▲蛆曰く 汚いと思ふならナゼ放つたか





雨が降りの松茸、雨後の筍とか能くいふが、成る臍斯う金が溜つては仕方がない、牛の糞か馬糞のやうにベタ／＼と溜りやがる、ペラポオめ、金などは要らぬといふに、矢鱈に借りてくれとか、預つてくれとか、断れば断る程持つて来やがる、世間には余程馬鹿な奴もあつた者で、金を借りながら利息なんてう、余計な者をつけてくるから面白い、借りる程の無い奴が余分の金のある筈もなからうに、さりとて金持泣か

### 金があつて困る記



せといふ者だ、ア、金持といふ者もイヤになつたワイ、おれば金の顔を見ると、身慄ひがする  
古昔紀の國屋文左衛門といふ男は、余り金があつて、一時に豪奢を極めたさうだが、どうも斯う溜ると、何んとかして減らす工夫を考へにやなるまい、マア金はかせの口を拵えなくちや、今に寝る所も居る所もなくなるに相違ない、鍛冶屋の槌六に頼んで、金糞にでも解かして貰ふか、紙幣タバを鋸引にでもして、紙屑にでもするか、尻ふき紙には厚くて困る、所で金糞といふ奴も厄介な者であるから、之れは佐渡の金山



へ御返上をして、今まで堀つた穴に埋るが得策のやうにも思はれる、紙幣だ所で、肥料のタシにもならざれば、飯のお菜にもならぬと来ては、こんな厄介な者はない、エイ公債證書だの、債券だのと、途方途徹もない紙切れが澤山に御座る、これらはどう處分をつけたら良からう者か  
 無い奴にくれてやれば、これか一番處分の早道だが、借りて余計に金を持つてくる程の者に、呉れたとてこれは貰ひも仕まい、あり余る米俵の所へ米俵を貰つたのちや、おれから始め痛み入る、頭痛膏の一つも余計に張る丈世話な事ぢや、有



る人は持つてゆつてくれといふし、無い人は此通りであれば乞食だ所で貰つても困るだらう、世の中にはイヤな者もあつた者ぢや、ソラ銀行から又利子が殖えたといふて来たゾ、斯う溜つちや、全く困るねえ  
 ヤレ〜そろ〜、蟲もつき出したやうに見わる、蟲干もせにやなるまい、ウルさい事ぢや、まゝよ庭先に抛り出して、道路の敷石にでもしたら、少しは通行人の爲にもなるだらう  
 ナント世話が焼ける、ア、金持といふ者はウルさい者ぢや



硬いもの 軟いもの

- 石部金吉……………絹漉豆腐
- 安宿の蒲團……………真綿の着物
- 焼餅の日増……………遊抜の樽柿
- 公正證書……………猫の乳
- 糍に煎豆……………鯛の刺味
- 鐵の格子戸……………遊女の肌
- 老人の背骨……………養立のお粥
- 金剛石の指環……………令嬢の指
- 土佐の鯉節……………玉子の黄味
- 貞女の操……………降り立の雪



くひづくし

- 三度の飯くひ
- 奥様の隠しくひ
- 小僧の買くひ
- 馬の草くひ
- 蕎麥好きの蕎麥くひ
- 川の橋くひ
- 雪隠ののぞきくひ
- 下女をつまみくひ
- 食客の盗みくひ
- 旦那の立ちくひ
- 牛のふすまくひ
- 土藏のしつくひ
- 道路の棒くひ
- 貴婦人の焼芋くひ



- 墮落男の女だらくおとこをんなくひ
- 猫は肴ねこさかなをくひ
- 夜中の温飩よなかのうぜんくひ
- 監獄の飯かんごくめしをくひ
- 約束の證文やくそくしょうもんをくひ
- 娼妓は操しょうぎみさを賣りてくひ
- 子供はネダツてくひ
- 乞食は貰こじきもらつてくひ
- 金持は遊かねもちあそんでくひ
- 書籍の蟲ほんむしくひ
- 怠惰者は家なまけものいえ迄くひ
- 僧侶の後家そうりよごりくひ
- 娘の腕むすめうででくひ
- 藝者は座敷げいしやざしきでくひ
- おやぢは威張おやぢいばつてくひ
- 職人は働しょくにんはたらいてくひ
- 百姓は作ひやくしやうつくつてくひ
- 商人は賣賣しやうじんばいばいでくひ



- 側杖そばづえをくひ
- 罰金ばつぎんをくひ
- 御馳走ごちさうをくひ
- 握飯にぎりめしをくひ
- 膾なますを煮てくひ
- 嘶家はなしかは饒舌しやべつてくひ
- 頬ほほばつてくひ
- 仙人は霞せんじんかすみをくひ
- 威赫おどかしをくひ
- 河豚は命懸ふぐいのちけでくひ
- 月給げつぎよでくひ
- 茶漬ちやづけをくひ
- 泥鰌どじやうを焼やいてくひ
- 桃の葉ももはを毛蟲けむしがくひ
- 舌鼓したづみを打うつてくひ
- 親の意見おやのいけんをくひ



### 滑稽名所地理

#### 一 金無川

貧乏國コマル郡艱難村にあり、借金山より分岐する一流と、  
 怠け嶽より来る一流と、食込山より流るゝ水とによりて此川  
 をなす、冬季師走の候に至れば、水源全く涸れて、火の車の  
 通行路となる事あり、洪水汎濫の恐れもなく、又田畑を荒す  
 の患ひも少ければ、橋梁もなく、渡し舟もなし、只水流細  
 き爲、助け船を呼ぶ事あり、



#### 二 やりくり峠

やりくり峠は、通常裏店九尺二間のうちであり、しかし表て  
 に金看板をかゝげ、洋館づくりの宏壯なる構へにも、所謂山  
 師の玄關といふて、外面は野原の如く潤く、奥は深林の如く  
 蜘蛛の網を張る家にもあり、一六銀行の通路にて、裏口は其  
 坂の上り口とせらるゝ、一度此坂に於て轉覆せんか、油止り地  
 獄に墮ちて、債鬼の苦みを受くる事幾何、大概は浮む瀬川の  
 岸を望みつゝ、死するを普通とす、

#### 三 縮尻坂



縮尻坂は、油断大敵山にあり、轉ばぬ先の杖を忘れたる時に此坂に於て尻餅をつく、泥まみれとなりて、根性が小さくなる故、縮尻坂といふ、尻の穴の大なるも良さが、食ひたる滋養物を、そのまま下すが故に、尻の縮小する事も大ひに可なり、シマツタと後悔村に歸る時に、此坂の有がた味は感せらる、

四 借金山

借金山は一名負債山といふ、有無通國にありて、融通道は其麓にあり、此山低き時には、融通道も狭けれど、此道廣き時



には、此山俄かに高くなりて、忽ち崩壊する危険あり、崩壊の際には、多くニツチモサツチモウゴカ又熱を吹き出し、家資分散泥、四方不拂砂等を湧出し、又他人に迷惑の懸岩を殘す、此岩は貧乏國に最も多し、

五 金溜り湖

金溜り湖は、諸々の邦國にあり、節儉美德國、勞働勉勵州、商買繁昌縣、順境國、又得手に帆かけ府にもあり、凡てボツくと出来る者にて、其一度形ちを現はすや、八方より金流押し寄せ來りて、自ら其面積を大ならしむ、併し乍ら、其大





なれば、大なる程、不潔を極むる者にて、良魚は此湖に住ま  
 ず、安全島は其中央にありて、平穩島は其左右にあり、無事  
 島には金満宮もありて、倉庫島は其有名なる者の一つなり、  
 但し折ふし遊樂船、驕奢船を浮ぶる事ありて、他人船には客  
 ン棒を以て揖をとる事ある故、不評判を蒔かれて、黄金判を  
 費す事あり、慈善船を浮べて、黄金溝を築き、其水を下流に  
 注ぐ時には、貧民潤ひて天下太平なる由なるも、多く其水を  
 通はしめざるが爲に、死湖(醜)となる由なり、

六がまん淵



がまん淵とは、瘠我慢淵の別稱にて、無理摺河にあり、自慢  
 山より起りて、天狗の鼻水流れて此淵をなすとも俗稱せらる  
 しかし淵は脆き者にて、唯木合ひ(氣合ひ)を以て、構成せら  
 る者故、實力石の流れ來りて、此淵に當る時には、忽ち崩  
 壊して影なきに至る、無き者ある風、食はぬ者を食うた風  
 等は、皆此淵より吹き起る者とす、力なきに、力餅、擔げぬ  
 に擔ぐ棒、出來ぬに出來る洋酢等は、此淵の名物なり、

七カマ灣

カマ灣は、自墮落國、投槍村、大字シヤウナシにあり、誠に



厄介なる灣にして、ナニモカマ灣にては、女房は髪ふり亂し、垢つきたる着物を着、湯にも入らず、水にも洗はず、三度の飯は食ひさへすればよし、茶碗も箸も、洗灣といふ次第にて、頓と不潔閉口する由なり、此灣の住民は多く偏屈者か、又無氣力者にして、通常の智識ある人は居らず、偶々仙人じみたる者もあれど、それも世を捨て、又世に捨てられたる人多し、但し腹立ちて、カマ灣といふ灣にては、浪風殊の外荒く、折ふし家タイといふタイ防を破壊して、一家を騒かす事あり、又焼糞といふ名物を産出して、茶屋酒、藝妓遊び等の繁昌す



る事ある故、花柳の巷にては、之を歓迎する由なり、犬もクラ灣といふ夫婦喧嘩の名所もあり、

八 ヤケガ嶽

妬けが嶽は、常に噴火を以て有名なり、峰に二本の角樹を生じ、チャカノ、光る洞穴あり、雷電の如き音響を發する時は、毒焰は麓より上る、此山荒く時には、人と我れとの境目もなく、縦横無盡、無暗矢鱈、グワン／＼騒擾を起して、器物は破壊し、着物は引裂き、諸齒は喰ひ縛つて、血の道は山頂に移轉す、凡て道路は下にあるを以て通常となすに、此道計り



は山上に築かるゝ所、誠に珍の珍なる者なり、

九 うはき沼

浮氣沼は、蓮ッ葉郡、ケイハク村にあり、色氣澤と聯絡せるを以て有名なり、色氣澤は、人情村字奥の林といふにあれど此浮氣沼は能く人の生命をとるを以て危嶮とせらる、沼には酒草、女草、後家草等生じて、又男魚、三味線虫、白首蛭等住みて、こひといふが沼中の王なり、此こひといふ魚の爲に、遂に沼中の捕虜となる、誠むべしと案内記に見ゆ、

ハタ 羅漢寺



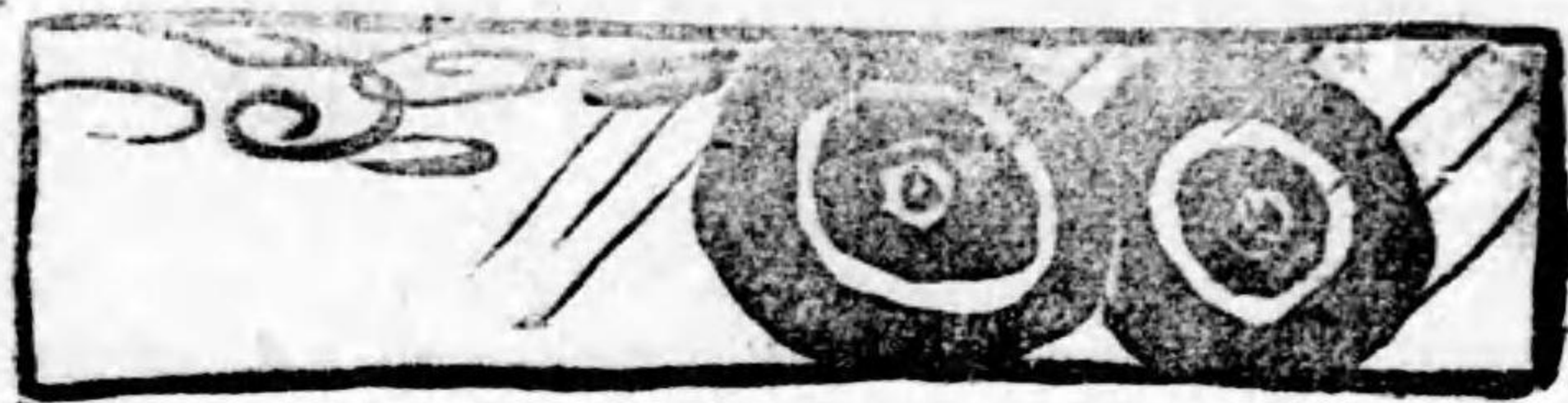
働かん寺は、クウ(食ふ)殿の建立を知らぬ里にあり、誠に以て怠け嶽中の名所とする所にして、詐欺、道樂、窃盜、追剝、狡猾カツバラヒ等は皆此寺院より出づ、働ラク寺はラクくと生活して、安穩平和に住居する事を得れど、此ラカン寺は世間の厄介寺なり、一名何事もアカン寺といふ、





## 太平樂

- マアそんなに慌てるナヨ、成るやうにすら成らぬ、
- マアそんなに吝ちくするナヨ、イクラ貯めても、死ぬ時には持つてゆけめえ、
- マアそんなにクヨくするナヨ、三度の飯が食へりや良いぢやないか、
- マアそんなに威張るナヨ、君ちや迎巳らの同胞ぢやないか、
- マアそんなに金、金といふナヨ、三井岩崎でも三杯の飯は



## 四杯食ひめえ、

- マアそんなに理屈計り言ふナヨ、理屈ぢや世の中は渡ねえ、
- マアそんなに怖がるナヨ、死ぬ時には矢ッ張り死ぬサ、
- マアそんなに吹き立てるナヨ、イクラ吹いても君の価値は君の価値丈だ、
- マアそんなに偉らい者だと思ふナヨ、君が偉らいと思や、先方の人も自ら偉らいと思つてゐる、
- マアそんなにセカくするナヨ、一寸先ア闇サ、泣いて暮すも一生笑ふて暮すも一生だヨ、



文字の妙

**大** 一點を肩に打てば犬となり、股間に打てば太いとなる  
 頭に一本を引いて天となり、豎に一棒を引けば無理乍ら木と  
 も變ず、横の一本を取りて人、片足一本を取りて、月を加ふ  
 れば有、月を取りて口を置けば右、口を削りて工を加ふれば  
 左、再び素に歸りて、更に斜に一沫せば天となり、女を加へて  
 妖物、妖物再び人となり、兩肩に二點を打てば火、火に火を  
 加ふれば炎、更に火を取りて欠を補へば炊、炊に至りて始



新算術拾貳題

- (1) 佳人+才子=薄命
- (2) 舌-閻魔=虚言者
- (3) 黒猫×白猫=斑猫
- (4) 夫婦÷姑=悲劇
- (5) (財布+百圓)-百圓=無一物
- (6) (甲男+女)-女+乙男=喧嘩
- (7) (生+長)+老×病=死
- (8) (醜婦+持參金)-持參金=離縁
- (9) (山林-樹木)+暴風雨=洪水
- (10) 財産-(酒+女+遊)=破産
- (11) 月+叢雲÷風=晴天
- (12) 意志×強固+堅忍不拔=成功



めて飯が炊ける、

**白** 一棒を頭に引けば百となり、年を下に重ねれば百年、年を取りて圓を加ふれば百圓、萬の字を入れて人皆莞々、億を入れておたまげ申す、更に一棒を去りて、下に水を加ふれば泉、水を去りて田を加ふれば畠、上の二棒を切らば白となり、更に轉じて木を加ふれば柏、餅を加へて柏餅、手に更代すれば拍手となる、更に木と手を取りて頭に黒字を冠すれば即ち黑白相争ふの形、髪を去りて下に置かば、即ち白髪すなはの二字となる、人白髪すなはに至つて止む、色の白きは七難隠す

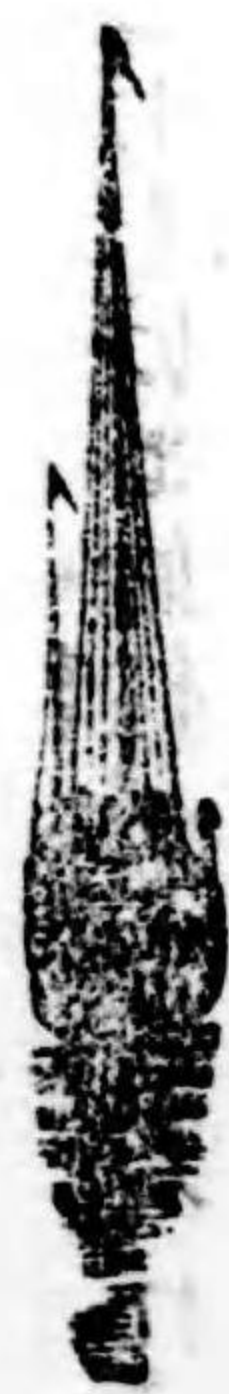


肌の白きは越後の美人、  
**女** 女に臣をクツつけければお姫様、石を添へれば妬となる、女の疾は嫉みにあり、良い女は娘、女昌んなれば娼賣をなし、女を支へて妓と稱す、女三人姦ましく、郎君を待つを女郎といふ、掃除は女の役目にして手へんを代へて婦と唱ふ、家を持てば嫁となり、髪を飾つて妻といふ、裏々たる女は令嬢、末の女は妹にして、市の女を姉と呼ぶ、女水邊にありて汝といひ、妻水邊に立ちて凄し、額に波ある女を婆と呼び、少き女を妙といふ、女の子は何人も好み、女に方を以てせば妨げ



らる、女節操を亡ぼせば妄となり、女の干り難きは奸といふ、女、男の中に入りて嬲られ、女王辰を添へて妊娠となる、女を取るを娶といひ、女の淫を姪といふ、女林の如く集れば、妻となり、女の叟を嫂といふ、女に眉を媚と稱し、女苦しさを免るを婉といふ、女に男の某を周旋するを媒と稱へ、女爰にありて媛と呼ぶる、嗚呼女の口に如く者無し、

~~~~~



### 衝突録

- 按摩と自轉車……………● 瀛車と瀛車
- 汽船と和船……………● 原告と被告
- 検事と辨護士……………● 荷車と人力車
- 旦那と旦那……………● 藝者と娼妓
- 妻君とお妾……………● お客とお客
- 皿に小鉢……………● 梯子段に頭
- 闇の廊下……………● 便所に二人



- 下駄に石塊
- 巡査と兵士
- ホット出の東京見物
- 耶蘇と佛教
- 姉と妹の智選み
- 赤飯に餅
- 藤原時平と菅原道真
- 姑と嫁御
- 豆腐屋と豆腐屋
- 江戸ツ子と贅六
- 自動車と電車
- 向ふ見すと電柱
- 堅い親父と道樂息子
- ハイカラに蠻カラ
- 天プラと牛肉
- 惠美押勝と僧道鏡
- 花嫁と色男
- 同町内の開業醫

珍作 猫の淨瑠璃



デーン……………デーン …… ツーン …… ツーン……………チャ  
 ン〜……………ペンペン……………ペン……………ニヤンニヤン……………  
 ……ニヤアゴ……………さてもその時彼が夫は、おまい可  
 愛いと手を伸し、……………コソバイ舌で……………ヤツ  
 く……………ヤツ、  
 鼻毛を讀むは此時と、雌猫は膝にもたれつゝ、  
 「ネー旦那さま、アノ帯買ふて頂戴ナ、」





三千世界に戀しさが、身にシミ／＼と浸みわたり、主の事ならドコまでも、たとへ海川何んのその、身を投げてまでも、死ぬわいなと、素振に見せる其容體は「花なら含み海棠の雨に濡れたる風情とは、ほんに之をばいふかいナ」と徐に催す哀の情、

「ウン好いとも／＼、それはお前がいふまでもない事、此胸にはチャンと昔より刻みこんであるわいな」

「ア、ッ嬉しい事嬉しい事、其やうに貴方が思ふてゐて下さるとは、今の今まで知らなくツてヨ、妾イすまないわネー

……………ニヤゴ／＼

と、柳枝の姿寄添へば彼の夫殿、只さへ細き眼を細く、涎も垂れる三千丈、

「ウム可愛い事、可愛い事、お前ならでは夜も日も明けぬ、たとへ此身が章魚とかり、海月となりて腐らうとも、心は鐵石いつ迄も、お前の膝にもたれやうぞへ」

「おおッこはい事、旦那さま、それはおキツイ御熱心……………しかしネーチヨイと旦那……………アノ帯買ふて頂戴ナ」

「ウム／＼／＼今忘れて居つたわい」





と、流石は彼の夫身を翻がへし、持つて來りし鞆のうち、取出たる百圓束

「これは餘りに少いけれど、お前が當座の小使にしや、此二百圓は、お前の母御に進上し、あとの七枚七百圓、之で帶でも買ひなされ、

目尻をさげて喜べる、顔は惠比須か大黒か、髯をひねりて、タラタラと垂るゝ涎の見事さよ、雌猫は愛嬌タップリと

「ほんとうに貴方コレ下すツテ……」

「やるもやらぬもある者か、わたしの此身はお前の身、私の



財はお前の財、晴れて添ふ日は夫婦ぢやないか」

二世も三世もそりや古い、今は明治の世の中ぞ、二十世紀、三十世紀、四十世紀、五十世紀、此世界のあらん限り、百億萬年経たうとも、地球が破裂を致さうとも、お前の愛は忘れまい、ホンに可愛や、これお主……

若しも女房があるならば、早う一ト目と見させたい、雌猫はニツコリ顔そむけ、

「妾ホントに嬉しいワ」

チヨイとなめづる舌の先、彼の夫知るか、知るまいぞ、障子



の蔭にチイ〜と、鼠鳴きする古狸、

「ヤイバたぞバたぞ」

右から入れば左に出で、口から入れば鼻に出る、之が淨世の

原理とや、海月男の腹絞り、いなせな兄イに下げわたす、

ニヤンともニヤゴの一幕は、げに猫どもの本領とこそは聞

ぬけれ……聞えけれ……ベン〜ンベン



### 滑稽古人の數學

これは羽前國清川宿の矢口旅館といふにある掲額ぢや、醒々  
 曉齊の原畫、勝文齊桂月の寫圖で、畫の上には左の計算がし  
 てある、

入増盛算

- |          |    |         |    |
|----------|----|---------|----|
| ▲宗祇のぼたんは | 一厘 | ▲材木の局は  | 三厘 |
| ▲人の道は    | 五厘 | ▲火をおこすは | 七厘 |
| ▲桶狭間の勝利は | 一錢 | ▲負いくさは  | 九錢 |



- ▲吉野の花盛りは 一圓
- ▲水ツぽい酒は 四圓
- ▲遊んでは 九圓
- ▲東京は日本の 一
- ▲女の大やくは 三
- ▲本因坊は 五
- ▲勘平は 三十
- ▲富が岡は 八萬
- ▲日本の犬さいふ王は 三貫
- ▲芋のゴリくは 二圓
- ▲又逢ふは 五圓
- ▲親類同士の縁組は 拾圓
- ▲問屋の倉は 二
- ▲耶ばたいは 四
- ▲いろ盛りは 十八九
- ▲箱王は 一萬
- ▲はりぬきは 一貫
- ▲なり駒屋は 四貫



- ▲法華經は 八貫
- ▲利根川の次ぎは 二合半
- ▲寝てくらすは 一升
- ▲成田屋は 三升
- ▲ねがふは 五升
- ▲鼻風ひきは 八九升
- ▲宮本無三四は 二斗
- ▲見懸によらぬは 四斗
- ▲西河岸の橋は 一石
- ▲あみがさは 百貫
- ▲玉川の末は 六合
- ▲藏出しの車力は 二升
- ▲手ならひは 四升
- ▲繪のぐは 六升
- ▲千葉周作は 一斗
- ▲深くなる笠は 三斗
- ▲から鐵砲は 五斗
- ▲釋尊傳來は 三石



▲金比羅は 四石 ▲成就是 五石 ▲夜船は 三十石

追補吾人の數學

- ▲自轉車は 二厘 ▲馬車は 四厘
- ▲竹屋の渡は 六厘 ▲馬鹿な奴は 八厘
- ▲戀の道は千里も一里 ▲車夫の言草は一里が 二里
- ▲豆腐屋へは 三里 ▲下女は 四里
- ▲箱根は 八里 ▲焼立ての 九里
- ▲焼芋屋の看板は拾三里



天界の生殖法

須彌山と鐵圍山との間に於ける四天下の人類は、其生殖の道を講ずるに當りてや、男女相交りて而して子を生ず、然るに金翅鳥と阿修羅とは稍其趣を異にす、即ち此二族は雌雄の交り殆ど人の如しと雖も、其懷妊は單に風氣の快樂によりて然りとす、夜摩天に於ては、男女手を執る時に於て其道を全ふし、兜卒天に於ては、男女念を合するの時に於て、其道を終る、化樂天は唯視るのみにして、他化自在天は只語るのみ、



魔天は互に相見る時に於て、其慾念を結了す、  
 切利天に於ては男女林の中に入りて、其林中の少女を見、以て  
 互に相愛すれば即ち其處に子を生じ、子の生ずるに當りてや  
 忽にして女子の掌に花を生じ、其花を夫に捧ぐるの時、其  
 中に既に生兒見えて潑漑たり  
 とは子供を生むにも、いろ／＼の道があつた者でござる

(起世經の一節意釋)



露 一 題

露の情と露知らず

露ほだされて玉の肌

ゆるせしことのくやしさと

今は涙の露の玉

雨 一 題

夕べの雨にしつぼりと



ぬれて二人の相合傘  
 合ふた合はぬと妻君が  
 妬いて降り出す涙雨

### 戀一題

戀にこがれて戀した果は

戀ぢやあゝぢやと痴話喧嘩

誰か聴こぞへ猫の戀



### 幽霊と同室の記

時維明治四十二年十二月末日、一人の老媪訪れて隣家に来る、  
 曰く妾はこれ親一人子一人の薄倖者、赤貧洗ふが如くにして、  
 今や脚を止むるの地に窮す、素より妾が身健全、又子息も齡  
 三十に滿つ、但し悲しい哉、妾が最愛の其子息は、國を出で  
 稍拾年、過る六月迄居を某所に卜して妾と二人住めり、然  
 るに如何なる天魔の魅りしか、彼には常に愛する某妓あり、  
 妓亦彼を愛して、濃情人の覗ふを許さず、偶々知人某、其妓



の將來愛すべきに非るを慮りて、勸むるに其妓を棄て、他に  
 新婦を迎ふべき事を以てす、妾亦之に意動いて、少しく勸む  
 るに其事を以てしき、然るに最愛の我子は何思ひけん、憤然  
 我が家を立出で、貯へる數十金を懐ろにし、何處ともなく身を  
 隠しぬ、妓も亦此事を知りて以來、自ら樓主に説いて、其籍  
 を脱し、身を置くに他の地を以てしぬ、而かも其後子息の姿  
 を見る事能はず、又其妓は妾の顔を知り、妾の家庭も知り、子  
 息の心をも知るを以て、屢々其樓に到り、尋ねるに我子の再  
 び此處に通ふや否やを以てし、又人を異にし策を變じて、其



實否を確むるも、妓頑として答へず、子息の行先亦知るによ  
 しなし、今や極月極日、寒風頻りに至り、食ふに米なく住  
 むに家なし、一人の愛兒は斯くの如く、妾を捨て、之を探る  
 に其手索りだにもなし、哀れ君は妾が愛兒の職業に従事する  
 者に、甚だ多くの知己を有せりと聞く、乞ふ妾の一身に食を  
 與うると同時に、愛兒の行先をも探りくれ給はずや、之れ今  
 生の一願なりと、主人意大ひに動いて、坊に紹介するに此老  
 媪を雇ふべき事を以てす  
 折ふし坊は獨身獨居の身分、心仙たらずして、身亦大ひに俗





務あり、日夜の多忙、猫の目玉の回轉するよりも烈しく、心  
 繁き事、正に益暮一時に來りしが如し、幸なる哉祐なる哉之  
 れ雇ふべし、時に齡四十を越えしといへば、豊顔艶姿の美婦  
 を雇ふと異り、意馬心猿の狂ひも生ぜざれば、末世に嬌名を  
 唄はるゝ事もあるまじ、南無阿彌陀佛、歸命頂來喝とばかり  
 は塵けば、老嫗來れり、訪づる聲は正に六十に近く聞ゆ、  
 世には不可思議の事もある者哉、聞けば當年四十五歳、しか  
 も吹聴四十一歳にして、其聲既に六十に近し、噫我過てるか  
 と、一時不審の眉をひそめしが、姿を見れば未だ若し、是や



此浮世に苦勞を重ねたる者は、姿少くとも身は老ゆめり、聲  
 も自然に頽れたる者か、而して其乙女の時を問へば、曰く十  
 四にして結婚し、十五にして子を産み、十七歳にして夫に別  
 ると、噫彼亦薄倖の身なるかな、  
 苦節茲に三十年、老いたる母と俱に二人、只一人の愛兒を育  
 てたるが、其愛兒は今や家を捨て、母を棄て、何處にか走れ  
 り、噫世に不埒の奴ありとも、斯く迄親を虐待する痴れ者は  
 蓋し親の罪か子の罪か  
 戀に上下の隔てなく、又親疎の別もなし、而かも親をも棄つ



るに至るか、越えて新年一月十二日、此老嫗は坊の宿にて風邪の氣味とて打臥しぬ、坊熟々觀察するに、此病尋常一様に癒ゆべくもあらず、其姿を見よ其姿を見よ  
 蓋し人生達觀すれば、未來をも知り得べく、哲察すれば、人の死期をも知るを得べし、人死する時は必ず淋し、生氣自ら失せて形骸唯り生く、故に人の死するや、容姿寂然として此世の者にあらず  
 果せるかな、國手の投薬も其功なく、臥床茲に數日、彼は燈光淡き夕べ、身は白雲樓中に化して、火中止むる一介の鬮



悲なるかな慘なるかな  
 彼の死するや前日、坊の家に一箇の女性あり、屢々看護に趣きて、又三度の食事も運搬す、或時は病者の好む物をすゝめ、或時は尿糞の始末をもなす、偶々日中其室に至る、髪より亂して瘠たる凄姿、アツと計りに、これ生ける幽霊、……此日鴉屋上に來りて頻りに啼く、  
 此夜彼病者は、精神既に衰へて、言語朦朧、最早此世の者に非るを告ぐ、知覺神經は過去と現在とに輾轉して、折ふし浮世の義理に惱む、時や正に夜深更、草木も眠る丑滿時、突然と



して室に響あり、至れば老媪自ら立たんとして自ら轉ぶ、見やれば青白き其頬には、薄黒き錆を帯びて、身體今や正に應擧の幽靈……此時此際奮發せざるべからざるは坊なり、坊や勇氣萬倍、此精神死せる形骸を抱き、或ひは衣を換へ、襟を整ふ、蓋し皆汚穢に染みしを以て也、しかして此夜只病者と二人、森々として聲無き其室を守る、耳を澄せば時針は三點、夜色沈々として幽色更に幽也、梁上の君子恣まゝに跳梁を専らにし、病者亦折ふし嚙語を吐いて、坊を驚かす、蓋し眠る能はず、考ふる能はず、只一室凄然として、又更に陽氣無し

嗚呼死、死と俱に起居を同うして夜は漸くに明く  
 此日事無うして、其夕べ七時、忽焉として老媪の息は絶えたり

### 新殖民のうた

ノンベンングラリと寐ころんで

小さい島でギャン〜と

犬のやうなる糞喧嘩

チット膽玉デカクして

南洋あたりヤツてコイ





新式 壯快歌

◎玄海灘から章魚が尻を出して

船の馬鹿めと尻をこいた

◎富士の峰にて雷めが怒鳴り

雲がたまげて小便たれる

◎浅間山をば小脇に抱いて

昆崙枕で寝て見たい

◎どうせ飲むなら只一口に



太平洋をば咽喉のもと

◎地球の奴めを自轉車代り

月の世界にチョト走る

◎加賀の白山今出た計り

あすはヒマラヤ峰の月

◎琵琶の湖水で電話をかけりや

宵の明星が返事する

◎月の都で夫婦になつて

天の河原でホニムーン



新作 雨都々逸

●雀鳴くのでフト目を覺まし

見れば小窓に朝日影

●待てば待つ程、待つ身のつらさ

早く聞きたい雁便り、

●添ふて嬉しい連理の夢も、

今は別れの子規

●主は鶯、わたしは梅よ、



早く一聲鳴かせたい

●主の歸りと門あけ見れば

さては水雞か罪な鳥

●年に一度の燕でさへも、

去年の古巢は忘りやせぬ

●鳩に三枝の禮ある中に、

まして夫ぢや妻ぢやもの

●四角張るなヨ浮世はなさけ

鶯の番ひは圓く住む



●のぼる旭日に鶴舞ひ添ふて

今日を祝ふか契り酒

●タベの夢には、一富士二鷹

三にお主の初らざり

●可愛らしいやさて此お主

鶺鴒返しの歌と歌

●羽毛は美うても孔雀の鳥は

鴉反哺の孝はない

●契りかためし、二人の仲は

物にたとへて鴨の味

●君に忠義はさて盡されよ

位もらうた鷲もある

●酒に酔ふてかあらマアお主

チヨイと危い千鳥足

●おやすみなさいよ、はや夜も更けた

待つは屏風の都鳥

●宵にや木兔ま晝は鶯

むごいお客よ百舌の鳥





新作動物情歌

●雁かりて来たのかまア親切しんせつな、

不憫ふびんな妻わたしと思おもつてか、

ホンにお主おしは鷺わらの夫つと

●アレ見みやしやんせ仲なかのよい、

●鴛鴦せしの番つがひも斯かくばかり、

●鴨かの味あじとは嫉ねたましい

●泣ないて別わかれて別わかれて泣ないて、

●又またも逢あ瀬なせを雁かり便たより、

●待まては夜明よあけの雞こりが鳴なく、

●今いまは廊くろはの里歸さかへり、

●夕ゆふの夢ゆめに千鳥足ちどりあし、

●見みれは阿呆あほうと鳥飛からすとぶ

●馬鹿ばかになさんな之これでも鷺さぎよ、

●例たとへ泥どろには染そまるとも、

●洗あらへば素もこの鶴つるの色いろ

●夕ゆふべ寝ねぼけてお客きやくを蹴けつて、





● お前馬かと言はれたら、

● 妾や馬なら主は鹿

● 新婚旅行の春の夢、

● 雲雀飛ぶのも知らないで、

● 眼覺りや雀が千代と鳴く

● 蚊帳もつらずに雑魚ねの祟り、

● 蚤にや責られ蚊にや刺れ、

● 眞にお金は唯とれぬ

● 炬燵やぐらの差し向ひ、



● 雪見の酒の鮓鍋、

● 下から小猫も飛んで出る

● フトした御縁も斯うなりや夫婦、

● たとへ別れよと言れても、

● 妾しや 蛤、章魚の性

● お酒代りにサイダーのお酌、

● 飲めば曇つた氣も晴れる

● 電車は通ひと戀路は遠い、

● 今かくと待つツラサ





下女問答

旦那 下女に向つて曰く「お前御嫁にゆきたいか」

下女 答へて曰く「イーエ」

旦那 曰く「それでも女だもの行きたいだらう」

下女 曰く「さうおつしやればマンザラ行きたくないといふ

事もないですが……」

旦那 曰く「さうぢやらう、それでは何處か良い所を世話してやらうか」



下女 曰く「イーエ」

旦那 曰く「夫は不思議、お前イヤでもないと言つたらう」

下女 曰く「それはさうですけれど、妾お嫁に行く事嫌いで

すわ……」

旦那 曰く「行つてもよし、行くは嫌ひか、それは面白いナ

ア」

下女 曰く「妾一生獨身で暮す積りです……」

旦那 曰く「それはまたどう言ふ事で」

下女 曰く「でも妾お嫁に行く事イヤですもの」



旦那 曰く「それは又妙ちやナア」  
下女 曰く「それでも旦那さん妾行くやうな所がありません  
モノ……」

旦那 曰く「だつて適當な所を見付けて世話したらよいだらう」

下女 曰く「デモ妾いやですわお嫁に行く事嫌ひ……」

旦那 曰く「ぢやドンな處へ世話したらゆくか」

下女 暫く無言、モヂくして曰く「妾旦那の様なよい方な  
ら……」

旦那 曰く「おれに惚れたのか……ヒヤーン」



### 興が進まぬ記

- 夫婦喧嘩した時はどうも、興が進まぬ、
- 宿屋で待遇の悪い時には、興が進まぬ、
- 物を紛失したときは矢張、興が進まぬ、
- 儲からぬ時損をした時は、興が進まぬ、
- 頭の痛いときにはどうも、興が進まぬ、
- 腹が減つてゐては何事も、興が進まぬ、
- 對娼の顔が悪くては一寸、興が進まぬ、



- 料理屋に仲居が下手では、興が進まぬ、
- 別嬪もツンと澄したでは、興が進まぬ、
- おカア様に叱られた時は、興が進まぬ、
- 喧嘩に負けた時には中々、興が進まぬ、
- おもつた事が貫かれぬと、興が進まぬ、
- 旅行遊山も天気が悪いと、興が進まぬ、
- お金がなくてはなに事も、興が進まぬ、



純正新哲學

- 人間は飯を食ふ動物也
- 人間は穴より生れ出でたる者也
- 人間は年數を経れば老いる者也
- 人間は死する者也
- 人間は色情を保てる動物也
- 屁は肛門より出で、糞も肛門より出づ
- 眼脂は眼より出で、鼻糞は鼻より生れ、痰は咽喉より出る



者也

○肺病は傳染する者、癩病も傳染する者、赤痢も、チブスも傳染する者也

○金の無い時は誰でも青い顔をする者也

○金のある時は奢り、無い時は縮む、普通の人情也

○人情は黄金に附隨して、有る時は無暗にオダテ上げ、ペコ

く頭も下げれど、無くなると誰でも振り返つても見ぬ者也

○朝飯は朝に食ひ、夕飯は晩に食ふ者也



○耳は音響を聴くの作用をなし、手足は人間を製造するの媒

介をなす

○色情は人間製造の元祖也

○人間の本体は人間の精液中に浮動す

○雞は卵を生み、人は子を産む

○人間悉く色氣の作用を失へば、人生茲に亡びて、世界も

國家も亡滅す

○女は能く世辭を言ふ者也

○隣り同士の仇敵も、子供同士の仲善しには、イツモ癩病も



顔も出来ず

- 理窟は言つても飯は食はずに居られず
- 貧乏人も金持も食ふ米には別状なし
- 貴族も平民も産れ出でし門は一也
- 浮遊も人間も死は一也
- 色氣を見て色氣を起す者は、眞の哲人にあらず
- 戀愛にて死する者は、大方初心の戀也
- 温鈍はツル／＼迂る者也
- 公園は楽しむ處なり



- 吉原は苦む處なり
- 寢床は寝る處なり
- 地獄極樂此世にあり





### 一番嘘をいふ者

講釋師、見て來たやうな嘘をいひ、は随分古いが、嘘を言はぬやうな顔をして嘘をいふ者には、第一政治家、外交家、次に新聞、次に本屋、植木屋の夜店もカナリ嘘をいへば、田舎の養蠶師も、中々嘘をいふ、政治家の嘘は、法螺の半分が交り、外交家の嘘は、嘘を看板にしての嘘をいふ、新聞屋の嘘は、大方勢力の争ひで、本屋の嘘は、賣らんが爲の嘘をいふ、植木屋の嘘は聞く方でも、嘘としての嘘で、養蠶師の嘘は、



自分の技量を誇らんが爲の嘘をいふ、坊主は地獄極樂ありと嘘を吐き、金持は金がないと嘘をいひ、百姓は米が取れぬと嘘をコボシ、商人は嘘で固めて、嘘で賣り、嘘で丸めて嘘で世渡りをしてゐる、凡そ世の中で嘘を言はぬ者は、釋迦か達磨か孔夫子か、釋迦も方便だと嘘をいひ、達磨も方便の一分身で、孔夫子も、「道は夫れ行はれざるかな」と嘘を默許す、キリストは嘘をいふなと戒めたれど、今の信者は皆嘘をいふ手品師の商買は、嘘で成り立ち、戦争は嘘の腕比べ、親も子供に嘘をいひ、子供も習つて嘘をいふ、サア斯う並べて見れ



- ベタくと上方女粘土質
- ベタくと盲判押す課長殿
- ベタくと正月の餅暮に搗き
- ベタくと先祖の顔に泥を塗り
- ベタくと顔に似氣ない女學生
- ベタくと壁に樂書する子供
- ベタくと肌にあひツつく汗繻絆

ベタくとバタと



ばどれが嘘の親方やら、どれが本家で分家やら、チア分らま  
くなつた嘘の世の中、





- ベタ〜と負けた證據に顔に墨
- ベタ〜と膠のやうなもたれ方
- ベタ〜と牛の尻から飾り餅
- △パタ〜と師走の女房忙がしさ
- △パタ〜と草履引ずる無性者
- △パタ〜と鐵瓶煮える四墨半
- △パタ〜と遅く働らく朝寝坊
- △パタ〜とみんな駈出す宵の火事
- △パタ〜と將基倒しに勝軍



- △パタ〜と風に音する宮幟
- △パタ〜と仕事片付く腕達者
- △パタ〜と女中慌てる急の客
- △パタ〜と煤掃濟んだ年の暮

黑白集

- 晝は白し 夜は黒し ○手足は白し 髪黒し
- 白墨白し 塗板は黒し ○糊は白し 漆は黒し
- 石灰白し 灰黒し ○表は白し 腹黒し





昔無くて今有る職業

- 新聞記者 ●雑誌業 ●寫眞師 ●辯護士 ●活版職工
- 石版業 ●鐵道官吏 ●電信技手 ●新聞取次 ●繪端書商
- パン製造 ●鐘詰業 ●靴鞄製造 ●洋服業 ●機關士
- 電報配達 ●交換手 ●鐵道工夫 ●軌道掃除 ●稅關官吏
- 女教員 ●銀行員 ●看護婦 ●自働車製造 ●自轉車業
- 會社員 ●ブリキ職工 ●洋燈硝子業 ●石油業 ●卷煙草商
- パイプ商 ●專賣局官吏 ●事務員式部 ●體操教員 ●運轉手



- 時計商 ●洋物問屋 ●人力車夫 ●點燈業 ●瓦斯會社
- 電機商 ●電燈會社 ●鐵道馬車業 ●車掌 ●列車給仕
- 新聞縱覽所 ●洋食店 ●ビアホール ●コーヒー店
- 牛乳業 ●ミルクホール ●汽車待合所 ●汽車辨當賣
- 蝙蝠傘商 ●リボン製造 ●石輪製造 ●隣寸商 ●屠牛業
- 牛肉店 ●氷水屋 ●ラムネ商 ●洋酒業 ●貿易商
- 公證役場 ●代書人 ●女子判任官





世渡り哲學問答

○問、人間は一生どうして暮せば善いか

△答へて曰く

泣いて暮すも一生、笑ふて暮すも一生、

○問、花嫁は如何にして撰擇すべきか

△答へて曰く

美醜は其心に在り、心の清らかなるは妻として貴し、  
氣に入つたのにせよ、



○問、美人の標準如何

△答へて曰く

心の美人か、肉の美人か

○問、金を貯め込むの道如何

△答へて曰く

無暗に働き、馬鹿に稼ぎ、其金を銀行又は郵便貯金  
に預けるにあり

○問、妻が自己の意に従はざるが如何

△答へて曰く、



何か氣に入らぬ事をして居るか、又は悪い事をした  
に相違なし、満不満は夫の手腕にあり

◎問、意中の婦人を従はせるの法如何

△答へて曰く

咄、速かに斯かる心を去れ、自己尊ければ人自ら従  
ふ



### 空兵衛の旅行記



ともくこゝに擔ぎ上げます空兵衛の儀は、矢張芋作の一種  
にて、田舎者の一人にて候、藁蒲團の中にオギヤと産聲をあ  
げ候てより、年は全く一年三百六拾五日、朝になれば朝飯を  
食ひ、晝になれば晝飯を食ひ、晩になれば晩飯を食ひ、寝る  
時に寝申し、起きる時には起き申し、春には花、夏には螢  
秋は月、冬は炬燵の中に轉がり、酒も飲めば湯茶も呑み、豆  
腐も食へば藪も食ひ、魚も食へば、牛肉も食ふ、鳥の啼聲



もチャンとわかり、雀はチウ〜鴉はカア〜、犬はワンワ  
ン猫ニヤゴ〜、夕べに上野の鐘を聞き、晨に浅草の鐘を聞  
く、これは少しく違つて候、奥山住居のことなれば、遠山寺  
の鐘を聞き、炭焚く爺を友となし、樵夫の業も心得て、尻拭く  
すべも知つて候、いっぞや春の陽氣のボカ〜とせしに心動  
き、一つ人體界の旅行をせん者と、先づ小さくなつて、目の  
穴に入り、それから鼻に抜け、耳に通じ、口に出で、咽喉に  
入り、腹を通つて、腸に下り、御奈良となつて、風と消える  
此一生一代のあらまし、左に旅行記を掲げて候

## 一 目の穴旅行

ヤア見えるぞ、見えるぞ、ヨック見えるぞ、人間様のなす事  
は何んでも見えるぞ、アイツは鼻の下の長い奴だナア、別嬪  
を見て涎れを垂らし居るぞ、彼奴は詐欺師だナア、八字の髻  
を生やし、金ブチの眼鏡をかけ、五ツ紋のお羽織、琉球の駒  
下駄、襦袢の角帯を締めて、英國製の中折帽を被り、縮緬の  
袖襦袢に米澤の重ね着、琥珀入れのステッキをのいて、いか  
にも紳士らしい顔をしてゐるが、懐中にある袱紗包の中には





贗札が澤山見えてゐるぞ、何んでも慾張どもを、ウンと欺して、懐中を拘り換へるといふ手段だナア、イヤ人の懐中をカラにする工夫を考へてゐる、彼奴は中々良くない奴ぢやがソオれ一人ブツかつたぞ、  
 ハハア！彼奴トウ／＼奥様の懐中を拘つししまつたナア、帯の間に狭んであつた財布をとつてしまつたぞ、女學生のそばに一人わかい男がついて居る、さしろの方に手を廻して、何かそこらあたりを探ぐつてゐるやうに見えるぞ、彼奴中々悪い奴だ、彼奴はア、いふ手段を講じて、陰性に陽性の電氣を



通はせ、婦人の心を變化せしめるのだぞ、ソオラ活動寫眞の闇室になつた、こいつは困つたナア、闇中の電氣、男女の或意識と意識が通ふやうに見えるぞ  
 山の頂邊に松の木が一本立つてゐる、ハ、ア塚があるナア、何んでも古蹟のある所だネ、所で學校生徒が澤山に見える、これは運動會だナア、辨當の中には握り飯に澤庵漬が見えるぞ、妻君が何かしてゐるナ、主人が不在だネ、呉服屋が来て居る、箆笥の中にはドツサリ着物が見ゆるが、あれを何にするのだらう、矢張不用品を澤山買入れるのだネ、ソラ質屋の



前に立つた、書生だ子、本を五冊計りかへてゐるぞ、彼の意識は吉原方面に無線電信をなしてゐる、放蕩家といふ奴だナア、

ソオリヤ馬車が来た、合乗りだネ、令夫人でなくて藝者だ、奥様は芝居見物をして居る、これでは家庭が圓滿にゆくまい下女がお芋を食べてゐる、書生が分配を受けてゐる、車夫が仰向けになつてゐる、晝寝の格だネ、イーヤ欠伸をして居る何か食ひたさうな顔をして居る、お菓子屋の前に、おバアさんが見える、菓子を買ふのだネ、ハ、ア拾銭買った、子供の



御土産らしいぞ、バアさん臍線がドツサリあるぞ、寢床の戸袋の上に五十圓計り見えるぞ、疊の下へも入れてある、用心が良い、四十兩計り見えるぞ、

ソラ團子を買つた、前垂の下へ隠すヨ、成程奥様の命令だナア、三時の間食といふ所だ、お茶が出る、一斤十六錢の安物だ、お鍋どんも仲間入りをして居る、つけ焼きの醤油に、鼠の小便が這入つてゐるのは知るまい、砂糖の中にサツカリンのあるのも知らぬ格だ、うまいといつて賞めてゐる、ア、情けない、そりやお客が来たやうだよ、



裏口からお神さんが飛び出した、髪をふり亂してゐる、夫婦喧嘩をやつたのだネ、成程御亭主、目を三角にして怒つてゐる、ソオラ薪割りを投げたヨ、火箸を抛つたヨ、當らない、畜生奴といふて内に這入つたヨ、お神さん漸く息をついた来たヨ、ホラ箆筒長持が来た、三本と五本か、三棹と五棹といふのだ、良い嫁入りと見えるナ、宰領は車に乗つてゐる、皆喜色満面だ、祝儀といふ者は誰も快い者と見える、これは婚禮の席と變つた、ナアル程花嫁さん心のうちは、全く波瀾万丈だネ、喜んでゐる、恥かしさうにもしてゐる、



心配の様子も見える、愉快な風も見える、盃をとつたが、無我念心のやうだネ、心臓の鼓動は劇しい、見物人の顔は皆馬鹿に見える、番頭確ツかり錢勘定をしてゐるナ、クスネル積りだぞ、そら五十錢計りとつた、白鼠め大分に溜めてあるゾ、然し新橋の方面にお馴染があるナ、良い鹽梅にとられてしまふらしいぞ、ソラ上野の動物園には獅子がある、象が居る、熊が居る、浅草には十二階が見える、ルナパークがある、活動寫真が盛んだ、お汁粉屋も見える、うどんや、蕎麥屋、今川焼、銘酒屋



も見える、観音の堂は高い、鳩が豆を食つてゐる、軽業も見  
 える、芝居も見える、寄席もある、紅梅焼も賣つてゐる、繪  
 草紙屋もある、雑貨店もある、玩具屋もある、電車も見える  
 浅草橋へくると兩國行の電車が見える、エイ何んだイ、高く  
 とまつて富士山を見れば、峰の白雪朝日に融ける、三保の松  
 原眺めが良い、イヤこんな調子で日本全国を見て歩いた日に  
 や、此眼が疲れてしまふ、ドッコイ一ト休み、ウン鼻に抜け  
 た

## 二 鼻の夕旅行

どうも好い臭ひがして居る、これが蒲焼といふ者だネ、成程  
 鰻の蒲焼、猫の蒲焼、猿の蒲焼、鯨の蒲焼、鯉の蒲焼、牛の  
 蒲焼、そんな者がある者カイ、牛の蒲焼聞いて呆れる、牛の  
 蒲焼は牛鍋に限り、又はピフテキか、ピヅカツレッツ、に定ま  
 る、サンドウ井ツチの鹽肉は、これ亦頗る美味な者だが、馴  
 ない人にはウマクもあるまい、豚の料理も一寸は良いが、日  
 本の人には賞美は薄い、ハハアこれが天麩羅といふ者カネ、







成程金ブラ、銀ブラ、銅ブラ、鐵ブラ、イヤ鐵ブラ銅ブラな  
 んといふ者はござらぬ、ブーンとやつて来たナ、魚の腹わた  
 の腐つたのか、イヤ人間の腹わたの腐つたのも、これ以上の  
 香ひがするだらう、鹽焼の香りは悪からず、酢の物の匂ひも  
 胸をスカせる、酒の香りだナア、銀釜か金釜か、又は櫻正宗  
 か、酒は灘の上等に限るネ、ホイ香つて来たぞ、香水の芳香と  
 いふのだネ、成程夏には汗臭いから、これも美人悪臭防禦の  
 一策、所で世間銅臭の薫りはどうした者か、線香の香ひがす  
 る、誰かゴネツたネ、死んだ事サ、縁起がわるい、チャ練油



の香ひと轉しるか、これならば女臭いぞ、白粉の香ひがする  
 お金の匂ひもする、御紙幣の香りもする、日本銀行へでもや  
 つて来たと見えるぞ、  
 ハイカラの匂ひもすれば、パンカラの香りもする、春ならば  
 櫻の香り、梅の芳香、山城宇治には新茶の香ひ、木曾の山に  
 は檜の薫り、あゝ匂香は好い者だナアといつてゐると、東西  
 くドンくチャンく、ビイくブウくブカくドン  
 く、もう耳の穴へ轉じて来た、



### 三 耳の穴旅行

抹香臭ひ薫りが残つてゐる氣がするから、これは説教場と見える、ゴオンと鐘が鳴る、成程寺院だネ、南ン无ン陀ブ南ン无ン陀ブといふ聲が聞える、爺婆は有難う〜といつてゐる和尚の洞魔聲がする、チーンと鉦も鳴る、成る臍極樂にでもゆけさうに思はれる、所でこゝはビシャーンと來た、妻君が障子をしめた音だネ、餘程腹が眞ツ立てになつたと見えて、ブス〜言つてゐる、煙管がポーンと來た、女將さんが輪に



吹いた所だナア、オギャ〜といふ、そら赤ン坊が生れたのだネ、ドーンと來た何か衝突したのだネ、イヤ天上で地震がゆつたのだと、天井が地震なら椽の下では雷かネ、イヤ全くゴロ〜と來た、これは石臼の音でゐる、ゴシ〜といふ大根卸しの音がすると、ツル〜と蕎麥を食ふ音がする、ガリ〜と數の子を食ふ音がすると、ベチャ〜と酒を呑む音に變る、ゴイ〜芋を植る音かと思ふと、シヤキ〜葱を刻む音もする、シユーツといふ、煮え湯がこぼれた音だネ、怒鳴る聲が聞える、隣りのおヤヂ酔拂らつて



の管巻らしい、トゥーの音はこれ山間の瀧である、シヤア  
 くは蛙の面ではなくて、小便の聲である、ブツは瓦斯の  
 發散する音で、サツは風の音である、ダウツとくるのは  
 海濱の波音で、バサは葦のゆるぐ音である、雞がコツコ  
 くといつてゐる、雄鶏が雌鶏を呼びよせる聲である、コオ  
 くといつてゐる、妻鳥が雄鶏を呼ぶ聲である、アツとけた  
 しましい、下女くんが溝におツこちたのだ、  
 カラくと笑ふ聲が聞える、豪傑笑ひといふのだネ、クス  
 くといつてゐる、何かふざけてゐるやうに聞える、ウフ、



ツといふ、これは忍耐の笑だネ、ポーンと来た、イタ、とい  
 ふ、何か喧嘩をしたのだネ、オルガンの音がする、ピアノの  
 樂も聞える、琴の音もする、ミインは蟬の聲だ、  
 チャイツと来た、洋食といふ所だ、チリチリといふ、松風  
 の音である、ベチアンと来た、古池や蛙飛びこむ水の音でも  
 あらうか  
 カンくと柏子木の音がする、夜に入つたのだネ、チャーン  
 くといふ、火事の報知だ、トンくと戸を叩く音がする、  
 ハアイとは妻君の聲らしい、餘程眠いやうである、ウームと



伸びてムニヤ〜いふ者がある、夢見の場だネ、カア〜と  
 聞えると、チウ〜ともいふ、森の鴉に軒端の雀が眼を覺し  
 たのだらう、ビービー〜と連続の音が聞える、工場の六時  
 と知れた、ドオン〜と大鼓の音がする、鎮守の神主が朝の  
 祈禱らしい、チリン〜は新聞配達鈴の音、ハアツタン  
 ヨンと「クシヤミ」をした者がある、多分風邪を引いたので  
 あらう、ニヤゴと来た、猫だ、ワン〜と来た、犬だ、ドツ  
 シンと聞える、棚から物が落ちたらしい、ガチャンといふ  
 茶碗の壊れた音だ、カッチンと響く、鍛冶屋が仕事をする音



だ、ブーンと蠅の通る音がする、春の日の長閑けき野邊が思  
 ひ出される、鶯がホーホケキヨと鳴いて、ヒ〜ンと馬が嘶く  
 趣が現はれる、シツ〜と牛を追ふ聲がすると、ペン〜  
 ペン〜と三味線の音、ハア陽氣だといつてゐるうちに、義  
 太夫を唸る聲、新内を語る音、浪花節の響き、娘手踊の歌が  
 聞えるので、ヤーツと喝采の積りで、大口が開いたと思ふと  
 ハヤ口の中へと歩いて来てゐる

四 口中旅行



千岳萬嶺、如何なる嶮山深澤をも恐れぬ大胃嶮家でも、こゝへ来ては、一寸迷つてしまふ、見渡せばこれ一つの城廓、表に向はんが、齒といふ關門列を正して、開閉自在上下自由奥の方と眺めんか、ノドチンコと稱する後門、同じく開閉自在にして、廓中亦舌といふ魔王の如きもの、起居伸縮唯心の儘に動いて、其威や猛烈、何事もペロリとせざる者は無い右に趣かんか、千古の肉壁斷巖の如く、左に臨まんか、萬層の血肉同じく絶壁をなして、何者も到底寄りつく術もない、管一切の食物無難に此城中を通過して、冷熱硬軟更に相關



せざるば、以て甚だ妙となすべきである、時しも朝の八時頃でもあらうか、香り床しき一杯の新茶が這入つて来た、咽喉門の方から、これは成程オイシイといふ、旨さうな液が出て来て、口中更にこれを欲するの形である、忽ち第二杯の旨いのがやツて来た、ノドチンコの後門も嬉しさうに開くと、今度は酸味の梅干に甘味の砂糖がお供をして来た、之も成程オイシイといふ形をしてゐると、第三杯目の茶君がやつて来て何れも満足な體裁で、咽喉門へと通つてしまふ、頓て這人つて来たのは、味噌汁といふ奴さんである、ゴタ



くしてはゐるが、土佐節に豆腐の小刻み、余り捨てた者でない、大根卸しのビリ、ツとするのが這入つて来た、口中俄かに温度を加へて、フッフーと熱を吹き出すと、奥の方で困つたといふやうに、城中の騷擾を惹起したが、青菜君のゴマまみれが来たので、漸く一度は静まつた、其うちに鯛君が来る、お芋君、蓮根君、午莠君がやつて来た、いづれも關門で木ツ葉微塵に噛み砕かれて、痛い〜と涙を流しつゝ来る米飯君は最も城中の歓迎する所となつてゐるが、七味唐辛子君が、味噌汁君と再びやつてくると、又々城中上を下への



大騷動である、

フッフ、フッフと度々熱が吹き出されると、今度は「カツレツ」といふのが取鏡めに来た、しかし之にも聊かカレイが掛つて居るので、又々口中の騷動を引起す、忽ちにして蒲鉾君がやつてくる、後門から手が出さうで、前門の検査も極めて粗雑に通過してゐる、舌王が鼓を鳴して喜んでゐると、漬辣韭の甘酸いのが来る、舌王直ちに鳴りを静めたが、再び大根卸の辛いのがやつて来て、熱度は舊に倍して、其波瀾は全身に汗を供給してゐる、



稍あつて、何れも蒲鉾君の仲裁に其騒動を鎮めたが、折ふし牛乳にパンといふ、味のあるやうな無いのがやつて来て、口中不足を訴ふる時もあるさうぢや、又ピスケット君の爲に、關門の自由を防げ、熱湯の爲に舌王の火傷をする事もあるさうぢや、しかし此舌王の中々鋭いには、いかなる英傑も三舎を避けてゐる。

舌王の威力といへば、第一、熱を甚だしく苦にしない、第二、冷かな者には決して恐れぬ、第三英雄豪傑を飴のやうに解かしてしまふのは、此舌王で、三寸の舌頭、實に國家を覆すの



偉力もある、しかも舌王自ら裁判官となつて、辛酸甘苦の味ひを判断すると同時に、人類の一生を司配して居るから、中々豪氣な者である

そこでお食後だといつて、コーヒーもやつて來、アイスクリームも來るさうぢや、最早晝だといつて、又々澤山の考がやつて來る

真先に飛び込んだのは、海老の先生らしい、柚の薫りがして關門ではスウツといふ音がする、其うちに鯉君がやつて來た散々に苛められてゐる、葛藤君もある、人參君も來た、鰈



君も来れば、焼豆腐先生も来る、巻替君、推茸君、竹輪君も来た、三葉先生も芳香を添へてゐる、別段變つた事もないが、薯汁君の勢力は中々烈しい、關門で吟味の違もあらばこそ、スル／＼スルツと這入つて、一直線に後門に通過してゐる、次は蕎麥君、溫飽君、素麵君、これらもスルスルスルツと門衛の緩嚴には、聊の利害も感せぬやうだ、次にはウ井スキー君、葡萄酒君、ビール君、正宗君多く舌王の賞玩する所となつて、城中歡喜の鼓に響き充たされる事がある、夜となつたといふので、例の正宗君がや



つて来た、成程後門の扉が自然と開く、ペチャ／＼と舌王か小鼓を鳴らして居ると、玉葱君が来る、牛肉君が来た、ロースといふので、舌王中々に御機嫌が良い鋤焼といふのである、奥の方から又手が出て来さうだ、ビールと變る、ウ井スキーとなる、舌王稍其賞美を過して、少しく酔眠の状態に入ると、關門自ら取締を逸して、涎殿がタラ／＼と流れて出る、酔ふては枕す美人の膝、醒めては握る天下の權、大言壯語もいつしか廻らぬ呂律と變る、舌王此時に至つては、夫れ千軍萬馬に優る利器も何の用をなさない





遮莫、此城廓に繰込む者の多いには呆れた、全く以て其數が盡されぬ、今口中日記の一端を擧ぐれば、羊羹君、饅頭君、大福君、牡丹餅君、煎餅君、金ツバ君、コハ飯君、雑煮君、カステイラ君、アンパン君、懸菓子君、干菓子君、葛餅君、柏餅君、カシハ君、鴨君、雉子君、豚君、兎君、馬肉君、鰯肉君、南瓜どの、西瓜君、紫蘇君、里芋君、馬鈴薯君、茄子君、胡瓜殿、大豆どの、小豆どの、大角豆君、豌豆君、蠶豆君、犬麥君、小麥どの、玉蜀黍殿、眞桑瓜どの、竹の子殿、茸殿、慈姑君、生薑どの、杏どの、梨どの、柿君、栗君、水



蜜桃君、林檎どの、密柑君、バナ、君、龍眼先生、煙草どの、昆布先生、若め君、鯡どの、鰯どの、數の子君、泥鰌どの、田螺君、栗餅君、黍餅君、稗團子君、蛭どの、蛤君、貝君、鯨君、ラムネさん、心太どの、サイダーどの、豆腐君、油揚君、天ブラ先生、ガンモドキ君、鰻の先生、鮪のお刺身君、鮪君、鮭どの、鱒どの、烏賊君、鱈君、太刀魚君、鯖どの、鯨君、鮎君、雑魚君、蕨君、玉子殿におすしさん、おでんサ、ンに焼鳥さん、お汁粉どのに洋食さん、重曹殿にクミチンキ、或は風のお薬より、腹痛、妊娠、産後の薬、何一つとして御



通行なさらぬ者はない、誠に以て奇妙な手烈な城廓である  
 と感心してゐると、後門の方から聲がかゝつて徐々時刻も飛  
 び移つた、お腹がヒモジイと仰有つてゐる、早うくの請求  
 に有合せた牡丹餅一ヶ、グツと關門に押通すと、後門亦忽ち  
 開けて身はスツとも、グツとも言はず、咽喉道をあとにして  
 こゝは胃の腑の消化國、腹の世界へと下りて來た、

### 五 腹中旅行

腹の世界は中々に廣い、先づ數へると五臟六腑、第一胃の腑



國を始めとし、肺臟國、肝臟國、脾臟國、心臟國、腎臟國、  
 大腸國、小腸國、膽國、三焦國、膀胱國、合せて拾一ヶ國あ  
 る、どこから旅行を始めやうかと考へてゐると、遙か向ふに  
 制札が建ててある、近づいて見ると、胃の腑國の建札である、  
 曰く

腹は八分目に食ふべし

と、成程胃の腑國丈あつて、うまい事をいつてゐる、段々に  
 進むと、後ろの方から、ドシ／＼旅行者がやつてくる、スツ



れも例の口中旅行者だ、サア斯う押懸けられては堪らないといふので、道避けると、これは肺臓である、ハア〜と息の切れ目繋ぎ目は、皆此國で司配するので、吹く息吸ふ息、引く息、走る息、それは目玉の飛出す程忙かしい、一分一秒一瞬の間も休みはないので、恐らく此世界中の多忙國であらう、こんな忙しい國に居ては、長い壽命も短くならうと、早速飛出して見れば、肝臓國に往つて居る、

肝臓國は、胃の腑國の上面にあるが、胆汁を製造する國とあつて中々、重要な國である、人間の膽玉といふ奴は、其原素



をこゝで養成せられるので、胆汁が申分なく、胃の腑國の消化を助けるに於ては、人間に逆上といふ者は少ない、逆上すると膽玉が逆になつて、お腹もデングリ返る次第であるが逆上しなげれば、沈着にして落つきの力がある、物事はおち付かざれば駄目だ、落付いて頭を冷かにして考へると、物事に間違がない、

非常頗るニガイ國であるので、成程良好な胆汁が多く醸造されたら、痲積の虫も騒ぐ余地があるまいと感じ、今度は膽玉を貯蔵する、膽囊國へ往つて見やうと思つたが、只膽玉が据



つてゐる丈では、別に面白くもないと考へたから、一ツ波瀾  
 万丈の心臓國へと飛込んで見る、  
 心臓國は人間の生血を分配する國とあつて、宛かも電氣の配  
 電所か、水道の貯水池のやうな働きをなしてゐる、血管に故  
 障があると、此國にも異状を起すのであるが、眞紅の血液が  
 ドシ／＼と出船入船の多忙を極めてゐるのは、是亦肺臟國に  
 劣らない、人間の死といふ奴は、此國の機關が休んだ時に、  
 始めて痲痺といふ症状を呈して、ゴロリとやるのであるが、  
 此國に異状なきに於ては、如何に咽喉突き、腹切りをやつて



も、さう俄かに死ぬ者でない、何れの病氣も、此國の痲痺、  
 又は破裂が最後の症状で、此状態の無い病氣に死といふ者は  
 無し、  
 人間最後の死を司とる國と聞いては、是は容易ならざる國で  
 ある、一つ細かに探險しやうと思つてゐると、「心配するナ、  
 心配するナ」といふ聲が聞える、「何を心配するナといふのだ  
 と聞くと、生あれば死あり、死あれば生あり、生死は度外だ  
 時節が来れば、イヤでも死ぬヨ」と、コン畜生、ペランメエ  
 といつた所で仕方がない、あゝ君子は危きに近寄らずと、直



ちに脾臓國に向つた、  
 脾臓國は血液の色素を司どる國で、美人には秘藏の國である  
 佳人才子の顔容も、其色澤の良いのは、此國人に愛せられて  
 居るからで、ホンノリと梅か櫻か海棠の淡紅色、これ此國唯  
 一の産出物である、マア染織工業の國である  
 さて斯う四五ヶ國も廻つて見ると、少々位置を變へて下界の  
 方へとゆつて見なくなつた、腹はお臍を中心とするが、お臍  
 が茶を湧かす時には、ドンな状態を呈するであらうか、又臍  
 の皮の搓れるといふのも、どんな工合に搓れるのかと、詮索



して見やうと思つたが、ハヤ行路は進んで、小腸國に這入つ  
 てゐる、来るワ／＼胃の腑國から輸出の死體、皆半死半生に  
 なつてゐる、哀むべし多くの旅行者、芋助、大根兵衛、茄子  
 五郎、南瓜平、章魚作、鳥賊祐、海老六、鯛右衛門、鯉助、  
 鮒三郎、何れも満足な形はない、斯る死骸のみでは仕方がな  
 いと、忽ち辭して三焦國へ渡つて見る、此國は三ヶ所に分れ  
 てゐるが、何れも大早りの國で、早魅續きである、それは體  
 内の水分を残らず汗や涙や尿に輸出の運びをして居るからで  
 愚圖／＼して居ると、こちらの水分まで吸収せらるゝ恐れが

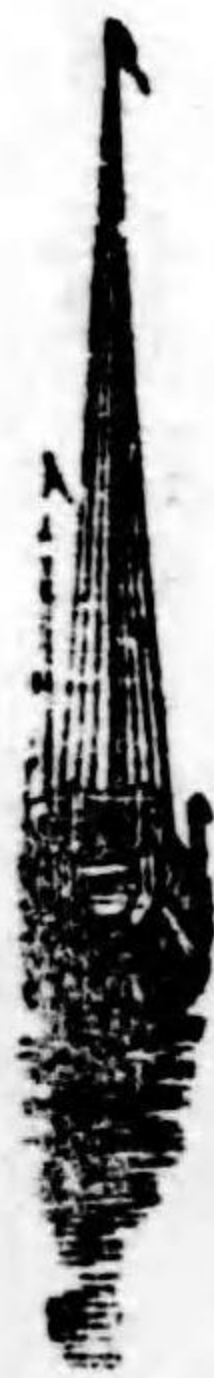


ある、これは堪らない、危嶮千萬と、直ちに腎臓國へ飛び移つて見れば、こはいかに、水分漾々として、左右一對の工場では所謂小便の製造をして居る、吁小便製造國、これは臭いと一直線に膀胱國に馳せつけて見ると、豈圖らんや、之は小便貯藏國、黄金ならぬ尿の倉庫、サア仕まつた、ドブンくと、泳ぐやうにして、漸く大腸まで、這ひ上つて見ると、これ亦如何、小腸國より輸出の死體、累々山をなして、其奇臭一段の中に、川越名物お薩の殿様、一族家來を引連れて少々御厄介にと、大荷小荷物の大旅行、エエツ堪らないと縦



横無盡に駆け廻れば、忽ち起る瓦斯の風、腹の世界も膨張して、飛行機なりと飛びゆく勢ひ、そのうちに小腸國より、ゴロ／＼ゴロ／＼、雷が鳴り出した、サア大變、如何なる天變地妖があらうかと思つてゐると、宛かも淺間の火山でも破裂したやう、ドドンと一發鳴り響く、續いて機關銃の如く、ブツブツ、ブツブツと連發の音がする、黄臭万丈、笑聲四方に起つて、身はいつしか風の中へと消えた、

カミシマ





有料廣告 三行一回

金を貸したし

一金壹萬五千圓也

但し無利息

右は大正元年十四月卅八日より、希望の諸君に前記の通りを  
一ト口とし一萬五千口を限り御貸し申すべし、返済期限は同  
十五年十六月卅七日午前十三時六十五分限り御皆済無之共不  
苦候 但し即刻倍額三萬圓にして御返済有之候 共そは御勝  
手たるべく候、ロハにて御持込有之候へば、精々使用して差上

可申、北廓新柳二橋何れとも御選定に御任せ可申候精々至  
急御申込あらん事を乞ふ

大正百年十二月三十二日

東京市神田區駿河臺

金満銀行

大競争廉賣公告

東京動物園

一、猫一疋 三味線を引くもの年齢十八年七十九ヶ月、





一、狐三疋

一、馬一頭

一、牛一頭

一、狸一疋

一、鼠三疋

吉原に永年の經驗あり何れも頗る美也、  
但し三圓の遊興代り、昨夜北廓より連れ來り  
たる最新のもの、

尻重くして立たざる事感すべし、飯は一年三  
百六十五升を食ふ、寢てゐる事と、涎を出す  
事妙也

官海の遊泳に頗る妙、年齢八十歳には二十年  
計り間あり、世人をゴマカス事得意也

多年或老舗に經驗あり、頭黒くして顔白し、



一、犬五疋

一、狼七疋

身の丈五尺四寸五分、手足尋常、倉庫又は帳  
簿係によし、穴を明ける事妙なり

權門に阿附する事は世界隨一、媚の爲には有  
る事無き事製造しても告げ口するに至つて妙

なり、權勢も振り廻す事もゐらさ者にして各  
國に特産あれど、日本産の分は中々鋭し、門

番夜警に甚だ良好  
娘義太夫など追廻す事に熟練す、良家の處女

等も大いに注意すべき事、但し狂水病を發し





一、番外  
巾着一箇

たる時には撲殺すべし  
何れも相當の地位ある者にして成るべく腰に  
つける様製造しあり、物を入るゝにあらずし  
て物を出すに妙也、金さへあればイクラでも  
買ふ事は出来る也、但し相當の保存料を要す  
る事勿論也



風雷の詞

風雷は簡譯すれば、フラクに通じ、今日暴風かと思へば、  
明日は静穩に變じ、昨日西風かと思へば、一昨日は東風と變  
じ、明年は北風かと思へば、昨年は南風と變り、時候々々に  
よりて、取とめの無き所が特色なるべし、さて其特色のうち  
暴風となれば 樹木を倒し、家を壊ち  
涼風となれば 美人の袂を繰へし  
秋風となれば 人生の波瀾を支配し



寒風となれば  
 潮風となれば  
 魔風となれば  
 疾風となれば  
 濱風となれば  
 浪風となれば  
 大風となれば  
 中風となれば  
 山風となれば

人類の身をツン裂き  
 好男子を黒男と變じ  
 戀風を起し  
 簑笠、傘を吹き飛し  
 磯馴松をイヂめ  
 人の心を騒かしめ  
 大船小船も吹き流し  
 人の五體を不自由にせしめ  
 谷に塵芥を吹き下し



火風となれば  
 谷風となれば  
 松風となれば  
 夕風となれば  
 朝風となれば  
 書風となれば  
 家風となれば  
 微風となれば  
 春風となれば

一村一市を焼き拂ひ  
 カ士のうちでも名聲が上り  
 雅人の賞美する所  
 美女の肌にもスキ通り  
 万人万物の氣分を快にし  
 一流をつくり  
 御無理御尤も  
 雲を拂ひ  
 人の心を和ぐ



威風は 堂々  
 一風は 變りもの  
 利いた風は 生意氣  
 下風に立つは 愚鈍  
 興風は 風儀を矯正し  
 士風は 子孫連綿にすべく  
 夜風は 身に浸みて毒  
 關東風は 元氣が良く  
 上方風は デオロくして居り



氣風は さッぱりしたが宜く  
 旦那風は 眞面目らしく  
 番頭風は 威張らぬが好し  
 淫風は これを警むべく  
 朔風には 馬嘶いて  
 宗風は 千差萬別  
 東風は コチといひ  
 南風は 競はず  
 薰風は これ南風



厭な風は  
見にくい風は  
弱い風は  
清風には  
御殿風は  
古風には  
正風は  
談林風は  
太刀風は

見せず  
なさず  
男子の恥辱  
明月をおもひ  
みやびかにして  
何となく床しみあり  
芭蕉派の俳諧  
滑稽趣味の俳諧  
物凄く



軟風は  
西風には  
花に風は  
人に風は  
あらし風には  
美風は  
悪風は  
知らぬ風は  
知つた風も

腐敗の素をつくり  
晴雨を半にす  
吹かぬが良く  
引かぬが宜しく  
當てぬがよろし  
永く保たしめ  
直ちに除くが可  
場合によりけり  
時による